
僕の愛しい吸血姫

大成 ケンジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の愛しい吸血鬼

【Nコード】

N3916BA

【作者名】

大成ケンジ

【あらすじ】

——満月の夜、僕は吸血鬼に血を吸われる——

吸血鬼、アリーシア・クロウリーに血を吸われた僕、伊浪恭平は、人としての生を失い、彼女とともに生きる使徒になる。

使徒になってしまったことを深く考えていなかった僕だけど、家を出ていた双子の妹、響子が家に戻ってきたり、アリーシアのような人間とは違う異端の存在を狩る少女、天川李桜に襲われたり。

そして、アリーシアの弱さと涙を知った僕は、ひとつの決断をする。

プロローグ・愛する君へ・

夜風に揺れる木々のざわめきが大きく音を立て、彼が花草を踏みしめる音を掻き消す。

金色の長髪を揺らしながら、一步、一步、ゆっくり、しかし、確かに歩を進める。

瞳に灯った紅は、ルビーのような輝きを放ちながら、しっかりと前を捉え、目的地を見定めている。

はぁ、はぁ、と荒々しい息を漏らし、全身を襲う気だるさ、額から伝う汗。

それらすべてを無視して、彼は歩き続けた。

決して止まることなく。

木々をかき分けながら進んだ獣道の果てに、彼は目的の場所にたどりついた。

「ふっ……」

なんとかたどりつくことが出来たということに安堵すると、思わず笑みが零れてしまう。たとえば、これから自分がどのような道をたどる運命にあるか知っていたとしても。

木々に囲まれ、ぽつんと意図的に開かれているように思える草原の上、彼は仰向けに倒れた。

すでに肉体の疲労は限界に達しており、これ以上の移動は無理に等しかった。

だが、それでも良かった。

彼の目的は、この場所にたどりつくことさえ出来れば、果たすことが可能なのだから。

錆ついた機械のように、歪な動きで腕を空に伸ばす。

指の先からは、砂粒のような、金色の粒子が出ている。

いや、違う。

それは彼自身だった。

彼の指が、金色の粒子となって、風にさらわれ、流れていく。

（覚悟はしていた……わかってもらいた……故に、後悔などありはしない）

ほんの少しの疲労も防ぐために、声には出さず、心の中で自分に言い聞かせるように呟いた。

彼は知っていた。

（すでに私の体は限界だった……ここまで持ってくれたことは奇跡に等しく、だからこそ、私はこの終わりを受け入れよう）

自分がもう、長くはないと言つことを。

死が、目の前に迫っているということ。

満月の色に似た金色の粒子を放ちながら、彼の体は消え、手はもうなく、今も手首から徐々にその姿を変質させている。

もって一分、と言ったところだろうか、と推測しつつ、彼は静かにまぶたを閉じた。

神経を研ぎ澄まし、夜風が揺らめかせる木々のざわめきを、ノイズを除去するようにして排除し、それ以外の音に耳を傾ける。

……がさ、がさ。

静かだが、確かに彼の耳には届く。

何者かが、草を、花を、木を、土を踏みしめる音が。

（私の魔力を感じて追ってきた、か。燃えかす同然の私の魔力を感じ取れるとは、彼らも相当に鋭敏なものだ）

自分を追ってきただろう人物たちに思いを馳せながら、まぶたを開いた。

すでに身動きが取れない彼は、首だけを左右に動かして、自分の現在を確認する。腕は、肘小僧までまだ

残っている。脚は、もう太もも辺りまでしかない。

痛みはなかった。それだけが救いかもしれないな、と再び満月を見

上げる。

（あの子にも、見せてあげたかった）

脳裏に浮かぶ、愛しい娘の笑顔。

（しかし、それも叶わない）

それはきつとだれのせいでもない。だれも悪くない。

（私と『彼女』が選んだ道は、決して間違ったものではなかった。今、ここにたどりついた私だからこそ、そう言える）

かつてここを『彼女』と訪れたとき、彼は後悔した。

自分は間違いを起こしたのではないのかと。後悔して、でもそれを断ち切ってくれたのは『彼女』だった。

だからこそ彼は、そんな『彼女』と交わした約束を果たすために、愛娘を置いて、己の命を燃やしながら、ここまでやってきた。

たとえ『彼女』がもうこの世に存在していなくとも。

自分がこれから、この世から消え失せてしまおうとしても。

ただひとつ、『彼女』と交わした約束を果たすことが出来れば、そこに悔いはない。

（さて……そろそろ、か）

腕が消え、脚が消え、もう残りは少ない。

彼の言葉を掻き消すように、一際大きな風が吹く。

彼を中心として、草原を覆うように金色の輝きが灯る。

彼の、命を賭した魔術が草原に響き渡り、風を起こしている。

その瞬間、彼を追っていた足音が早くなる。

しかしそんなこと、すでに彼には関係なかった。

（わた——目的——果たされた——アリサ——）

巻き起こる風が、金色の粒子をさらう。彼の肉体の消失が早くなって、今にも消えそうになる。

おぼろげになる意識の中で、『彼女』と、愛する娘との記憶が走馬灯のように流れる。

いろいろなことがあった。

だが、その中でも彼の中に鮮明に残る、愛しい記憶が、蘇る。

娘を中心に、左右に彼と『彼女』が立って、手を繋ぐ。そうして三人で歩いた、彼の地。

（——ア——リー——シア——）

蘇った娘の笑顔に、微笑み返すようにして、彼は――

（――――）

最期を迎えた。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【1】

世にも綺麗な少女が倒れていた。

満月の月灯りに照らされて、その存在を主張するように燦然と輝く金色の長髪を乱れさせて、アスファルトに横たわる少女。

その日の僕は、いつも通りに学校に行つて、授業を受けて、家から徒歩五分のコンビニでのアルバイトを終えて、家に帰宅する途中だった。

その道中に倒れていた少女を、僕はすぐさま駆け寄り、抱き起こした。

「大丈夫ですか？」

返事はない。

整った顔には少しの汚れと汗が見られる。僕はポケットからハンカチを取り出してそれを拭う。

規則的に繰り返される呼吸は荒く、少女の様態が悪いことを示している。

すぐさま最寄りの病院を思い浮かべてみるが、一番近い病院でも二十分はかかってしまう。携帯で救急車を呼ぶという手もあるけど、残念ながら、バッテリーが切れてしまっているので無理だ。

「……………血……………」

少女の小さな唇から、吐息のように小さな声が漏れた。

『ち』という音。

それを聞いた僕は、少女がどこか怪我をしているのじゃないかと思
い、少女の四肢を見渡す。

少女はいわゆるゴスロリ服と呼ばれる服装に身を包んでいて、変に
露出している箇所が多いので、これはなかなか嬉しい……いや、目
のやり場に困るのだが、見た限りでは出血している箇所は見受けら
れない。

もしかして、僕は少女の『ち』という音を間違って解釈したのかも
しれない。それが、『ち』という音以外にもなにかを言っていたの
か。

「ねえ、だいじょ——」

訊ねようと、少女の顔を見ようとして、僕は固まった。

あまりにも近過ぎる。それこそ、ほんの数センチどちらかが身動きを取れば、唇と唇が重なってしまいそうな距離に、少女の顔があった。

蒸気して赤くなった頬。ふつくらと盛り上がった桃色の唇。美しく長いまつ毛。少女が僕に身体を寄せたことにより、密着した腕に伝わる胸の感触。

どれもが僕の心臓の鼓動を高まらせ、思わず唾をぐくりと飲んでしまふ。

下手に動かすと、僕がわいせつ罪に取られてしまうような危険性もあるため、しばしの膠着状態のまましていると、不意に少女が力を失くしたようになだれ込んできた。

それを受け止めると、僕と少女は地べたで抱き合うような形になってしまった。こんな綺麗な娘を抱きしめられるなんて、とんだ役得だよなあ……とか思っている場合じゃなかった。

僕の肩に顎を乗せる少女の荒い息はそのまま、僕はどうすればいいのかわからず、とりあえず少女の背を撫でることしかできない。

それでどうにかなるかはわからないが、病気の人にはよくこうしているような気がする。

こういうときには、自分に看病の経験がないことを恨みたくなる。

といっても、僕も妹も身体が頑丈だから、滅多なことがない限り病気なんかしないので、仕方がない。

不意に、首筋をなにかがなぞった。温かくて、ざらざらしていて、それでいて水っ気あるなにか。

全身を駆け巡る悪寒。

脳内に鳴り響くレッドシグナルに、僕は反応することができない。

金縛りにあったかのように、凍りつく肉体。

動かない。

動かすことができない。

指先から足先まで、まったく動かない。

何者かに身体のイニシアティブを握られたように、こちらの命令を一切受け付けない。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【2】

そうして、時は訪れる。

「……っ！」

噛まれている。首筋に突きつけられた牙は、僕の首を挟むように突き刺さり、確かな痛みを僕に与えている。

身体が動かないから、いったいどういう状況にあるのか把握することはできない。

だけど、おそらく、僕に牙を突き立てているのは、この少女だ。

そう理解するのが早いかな、自分の中からなにかが失われていくような気がした。

ごくっ、と鳴ったのは少女の喉の音。

なるほど、『血』っていうのはそういうことだったんだ。

こういうとき、自分の理解力の速さが少し恨めしくなる。

この少女は普通じゃない。たぶん、世間一般で言うところの化物とか妖怪とか、そういう類の存在なんじゃないかな。

よくわからないけど。

首筋に牙を突き立てて、血を飲む類の存在と言えば、やっぱり吸血鬼になるのかな。

人間離れた美貌を持っているなあ、なんて暢気に思っていたけど、本当に人間じゃないなんて、こりや事實は小説よりも奇なり、ってことなのかな。

心の中で苦笑しつつも、僕の肉体は確かに異変を感じ取っていた。

抜かれていく血を感じながらも、動かない肉体ではどうしようもない。

もしかしたら、僕はそのまま血をぜんぶ抜かれて、死んでしまうのかな？

それは少し、嫌だな。せめて、父さんと母さん、妹になにかを残したかったな。

でも、僕の命ひとつで、この少女を救えるのなら、それはそれでいいことなのかもしれない。

吸血鬼かもしれないけど、絶世の美女と表現してもいいほどの女の子だし、艶めかしい喉の音とか密着した胸から伝わる鼓動とか、すごくいい。

なんていうか、すごく満たされる。見た目とか、ドストライクだし、こんな女の子に殺されるのなら、それはそれでいいかも。

自分で言うのもなんだけど、僕は思った以上に楽観的なかもしれない。

というか、どうしようもないしね。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【3】

……あれ？

ふと、身体に違和感。血が抜かれたからか、少し貧血気味だけど、それでも頭ははっきりと思考を可能としている。

さっきまで動かなかった肉体の動きが解放されている。

加えて、どうしてか血を抜かれる前よりも軽いような気がする。な
んでだろ。

それはまあいい。

おいておこう。

とりあえず、今は首筋に噛みついた少女を、っと。

そう思ったのだが、すでに少女は僕から牙を抜いている。

息を荒くしていたさきほどまでの様子とは打って変わって、安らか

に、寝息を立てて眠っている。

血を吸ったおかげで、回復したのかな。

首筋に手を伸ばしてみる。

そこには確かに小さな穴のようなものが二箇所ある。

触れた手を見ると、赤い血痕がそこには残っている。

やっぱり、吸われたんだよな。

そう自覚して、それでも生きていることを不思議に思う。

大抵のフィクション作品とかだと、吸血鬼に血を吸われた人間は死んでしまつか、吸血鬼のしもべになるかの二つの結末に分類される。

だけど僕は生きている。

だとしたら、僕は後者——吸血鬼のしもべになったのかな。

少しありえない妄想だけど、でも、実際に血を吸われたし。

考えても答えはでない。

答えを持つのは、僕の腕の中で眠りこけている少女だけだ。

僕は少女の身体を背に乗せる。

ここに残していくわけにもいかないし、なにより、僕がこの少女に一目惚れをした、もとい、少女のことが気になってしまっているのだ。

とりあえず家に連れて帰るけど、決して誘拐ではない。

それだけは言っておく。

でないと僕が本当に犯罪者になってしまうから。あくまで彼女を保護することと僕に起きた状況を把握するためなのだ。

誰にするでもなく、心の中で言い訳を残して、僕は少女を背負って帰途に着いた。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【4】

少女を家に連れて帰って、僕はまず風呂に向かった。

別に少女に対して卑猥なことをしようと考えているとか、そういうことではない。

バイト帰りにシャワーを浴びるのは僕の習慣なのだ。

いくら例外に当たる出来事が起きたからといって、生活のリズムを崩すわけにはいかない。

少女は現在、居間にあるソファに横たわらせている。

体調が悪そうにも見えなかったから、特になにをした、というのはないけれど、一応毛布をかぶせておいた。

なんというか、彼女の格好は、健全な青少年である僕にとっては毒に他ならないのだ。

シャワーを浴び終えて、ドライヤーとタオルを使って髪を乾かす。

僕の髪は男子にしては長く、よく女子みたい、と言われるような長さなので、手入れは欠かせない。

髪が乾いたところで、僕は居間へと向かう。

「……？」

居間に、少女の姿はなかった。

いや訂正。

「だれ？」

少女が寝ていた場所にいたのは、僕が出会った少女よりも、幾分か幼い容姿の少女だ。

金色の髪や顔立ち、ゴスロリ服は変わらない。

でも、明らかに幼い。

……まさか、容姿が変化した……？

血を吸ったり、幼くなったり、忙しい娘だなあ、なんて思っている
と。

「ん……」

少女の唇から吐息が漏れて、その瞳が開かれた。

僕と同じ黒の瞳を持つ少女は、寝ぼけているのか、視界が定まれないように目だけをきよろきよろと動かし、そして身体を起こした。

身体が小さくなったせいか、身につけているゴスロリ服がずれ下がり、僕は思わず目を逸らしてしまう。

ただでさえ露出が多いっていうのに、そんなにサービスされるとい
ろいろヤバい僕である。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【5】

「えっと……大丈夫？」

目を逸らしながら、と言いながらも、目の端に少女の姿を残したまま、訊ねる。

僕の声は聞こえたようで、少女の目が僕を捉えた。同じ黒の瞳だというのに、どうしてか彼女の瞳は黒真珠のように美しく見える。

舐めたい、そんな願望は胸の底に沈めておこう。

「……だれ？」

僕がそうしたように訊ねる少女に、僕は答える。

「僕は伊浪恭平いなみきようへいって言うんだ」

「きょうへい……」

首を傾げる少女。

おそらく、自分の中で僕の名前を検索してみたのだが、一致する人物がいなかったのだろう。

まあ、そりゃそうだろうけど。

対して僕も訊ねる。

「君はだれ？」

「わたし……アリーシア……」

「ありーしあ？ 可愛い名前だね」

言うと、少女、アリーシアは顔を赤くした。

しかし、瞬間的に、その顔が豹変する。

寝ぼけていた頭が覚醒したのか、見知らぬ存在である僕に驚いているように見える。

正直、聞きたいことはたくさんある。

君はいつたい何者なの？

どうして倒れていたの？

どうして僕の血を吸ったの？

僕はどうなったの？

だけど、残念ながら僕は女性に強引になにかを訊ねることができない。
ような性格ではないので、そうすることはできない。

アリーシアがその口を開いてくれるまで、待つしかないのだ。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【6】

思いつつ、アリーシアを見ています。

「…………なに？」

「い、いや、なんでもないよ？」

ダメだ。やっぱりあの服は僕には刺激が強過ぎる。

僕はアリーシアに一言告げてから、自分の部屋へと向かった。

なにか、着替えになるような服を探すためだ。

本当は妹のものを借りたほうがいいんだけど、妹は全寮制の女子高に通っているから家にはいないし、両親も海外で仕事をしているので、家にいるのは僕ひとり。

そんなときに妹の服がなくなっている、なんてことになれば、僕の立場が危つくなる。

ただでさえ、妹には変態扱いされているというのに。

クローゼットの奥から段ボールを取り出して、中身を取り出す。

僕の幼いころの服がそこにはある。

アリーシアの現在の体型からして、僕が小学生、それも高学年のときの服でいいかな。

それらしき物、無地の白シャツと膝までの丈のズボンを持って、居間に戻る。

「これ、よかつたら着替えて。そこを出たところに洗面所があるから」

渡すと、アリーシアは大人しく、僕の指示に従って洗面所へと向かった。

……というか、彼女、自分が縮んだこと、気づいているのかな。

……。

バタンッと、居間の扉が勢いよく開かれて、アリーシアが居間に飛

び込んでくる。

「……なにこれ」

「いやあ、説明する分には構わないんだけど、とりあえず、自分の今の姿をよく見た方がいいよ」

苦笑いをしながら、アリーシアに言う。

僕がそう言った理由。

アリーシアは、彼女が身に付けていたゴスロリ服を脱いでいた。

しかし、僕が渡した服は着ていなかった。

さあ、それから導き出される答えはなにか。

簡単だ。

「なかなかセクシーな下着だね」

身体が小さくなることによって、ぶかぶかとなった上下黒の下着は
ずれて、彼女の肌を露出してしまっている。

幼くなることで各部が膨らみを失っているけど、やはり、彼女の姿
はあまりにも綺麗で。

僕はダメだとは思いながらも、その姿に釘付けになってしまふ。

「っ!」

僕の指摘に悲鳴にならない悲鳴を上げて、そのまま駆け足で洗面所
へと戻って行った。

……いやあ、いいものを見た。

膨らみを失った胸に、くびれを持った腰回り。

白くて細い四肢。

……うん、良かった。

ひとり、ガッツポーズをする僕の姿が居間にはあった。

今なら変態と呼ばれてもたぶん否定できない。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【7】

少しして、僕が渡した服に着替えたアリーシアが戻ってくる。

「説明、してもらえる？」

開口一番、アリーシアは言った。

「うん、説明するよ。その前に、ちょっとソファに座ってくれないかな？」

「なにするつもり？」

「大丈夫。やらしいことはまだしないから」

「……まだ？」

「冗談です。しないから、ちょっと座ってよ」

アリーシアは渋々ながら、ソファに腰掛けた。

僕は洗面所に向かって、そこから櫛と髪留めのゴムを持ちだして、居間へと戻る。

ソファに座るアリーシアは訝しむように僕を見ている。

僕はそれに両手を上げて、なにもしないことを示すけど、どうにも信用されていないらしい。

鋭い視線に少しドキドキしながら、僕はソファに座るアリーシアの後ろに回った。

「こんなに綺麗な髪をしているんだから、丁寧に扱わないと」

「ん」

櫛でアリーシアの髪を梳かしていく。

よく妹の髪を梳かしていたから、こういうのは慣れたものだ。

アリーシアの髪は引つかかることがなく、とても手入れが行き届いていることが窺える。

梳かされている間、アリーシアは僕の行動を不審に思いながらも、時折、気持ち良さそうな表情を浮かべていた。

ある程度整えて、最後に長い髪を、ゴムを用いて後ろで結う。

「よし、これでいいかな」

「……なんでこんなことするの？」

「僕が君を愛でたいから、かな」

……。

「冗談だよ？」

「冗談に聞こえない」

「まあ半分は本気だからね」

「今すぐにも離れたいけど、事情を聞かなきゃならないし……」

なんというか、もうすでに変態扱いを受けている気がする。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【8】

それはいいとして。

僕はテーブルのところから椅子を持ち出して、アリーシアの前に座る。

「それじゃあ、なにかから話そうかな」

「ぜんぶ。最初から、今までのことを」

わかった、と答えて、僕はアリーシアにすべてを話した。

僕が道端に倒れていたアリーシアを見つけたこと。

アリーシアが僕の血を吸ったこと、それに加えて、僕の身体が妙に軽いことや、気が付いたらアリーシアの身体が幼くなっていたことも伝えた。

すると、アリーシアは顎に手を当てて、考えるような仕草をした。

「わたしがあなたの血を吸った。するとわたしは幼くなり、あなたは身体に変化が起きた……」

「なにかわかったの？」

「……」

答える代わりに、アリーシアは僕を見た。

どこか申し訳なさそうな、そんな瞳が揺らぎながらも、僕を捉え続ける。

「なんて、ややこしいことに……」

「どうかしたの？」

「……今から話すこと、信じられる？」

「信じるよ」

即答で答える。

「君がここで僕に嘘をついたところでメリットがあるとは思えないし」

それに、と付け加える。

「君みたいな可愛い女の子の言うことを、僕は疑わないよ」

少しきざつばい言いまわしだけど、僕は昔からそういう性分なのだ。

僕をこういう風に育てたのは父さんだし、そういう面でも、仕方がないだろう。

笑いながら言った僕に対して、アリーシアは少し顔を赤く染めて、しかし、すぐに真面目な表情になる。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【9】

「まず、わたしのことを話す。わたしの名前はアリーシア。血吸いの一族、吸血鬼と呼ばれる種族に属する妖魔」

「ようま?」

吸血鬼だろうな、ってことは想像がついていたけど、『ようま』という言葉に聞き覚えはない。

どという字を当てるんだろう。

「人間で言う、悪魔や妖怪、物の怪の総称だと思ってくれれば良い」

なるほど、と頷く。

なら当てる字はおそらく妖怪の『妖』に、悪魔の『魔』で『妖魔』でいいはずだ。

「私はある目的で日本にやってきた。でも、移動のときに力を消費し過ぎて、倒れてしまったみたい」

「力？」

「わたしたち妖魔の力は、魔力と呼ばれる。その力を得る方法は妖魔によって異なるけど、わたしの場合は血を吸うことで、魔力を得るの。でも、事前に用意していた輸血パックをぜんぶ使ってしまったの」

吸血鬼って、輸血パックから血を得るんだ、なんて最近の吸血鬼事情に驚きつつ。

「それで僕の血を吸ったんだね」

「そう。でも、それがわたしの不幸であり、あなたの不幸」

どういうこと？と首を傾げる僕。

「あなたは、おそらく、『妖魔殺し』を持った人間」

「『妖魔殺し』？」

「そう。わたしたち妖魔にとっての天敵。妖魔を殺すことができる、

人間が持った異能の力。あなたはそれを所持している」

言われて、考えてみる。

僕にそんな力はない。

生まれてこの方十六年、そんな異能の力なんて大仰なものを使ったことはないし、その存在すら知らない。

僕はどこにでもいるような普通の高校生に違いなのだから。

「気づかないのも無理はない」

「どういうこと？」

「妖魔殺しの共通点は二つ。妖魔に対して優位権を得ること。……
と言っても、力に大小はあるから、すべての妖魔に勝てるというわけではないけど。もうひとつは、その力が生まれ持ったものではなく、後天性だということ。そして、その中でもあなたの妖魔殺しはたぶん、特殊なもの」

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【10】

次々と入ってくる情報をなんとか頭の中で整理する。

この世には妖魔と呼ばれる存在がいて、アリースアは中でも吸血鬼と呼ばれる存在。

彼女は持つてきていた輸血パックを失い、魔力が不足して、路上に倒れていた。

そして、そこに通りかかった僕の血を吸った。

そしてそれが僕にとっても、アリースアにとっても不幸なことなんだと彼女は言った。

僕は妖魔に対して優位権を得ることができる妖魔殺しと呼ばれる力の所有者で、それにはいろいろ種類があるんだけど、僕の妖魔殺しは特殊なものらしい。

頭の中でなんとかまとめて、そしてアリースアの次の言葉に耳を澄ませる。

「あなたの妖魔殺しはおそらく、『否定』と呼ばれる力。妖魔に関するありとあらゆるものを否定する力。だけど、『否定』の力を持った人間はほとんど自分の力に気づかない」

「どうして？」

「妖魔殺しは普通、自分の意思で発動することが出来るけど、その中でも『否定』は自分の意思で発動することが出来ないものなの。だから、力が覚醒していても、妖魔と接触することがない限り、それに気づくことはない」

そこまで聞いて、ひとつの結論に至る。

「ということは、まさか、アリーシアは僕の妖魔殺し、『否定』の力を受けて……？」

アリーシアは頷いて、肯定を示した。

「あなたの血を吸った結果、わたしはあなたの『否定』の力を受けた。その結果が、これ」

自分の身体を示すように、アリーシアは両腕を大きく広げた。

「あなたの『否定』の力は弱いんだと思う。だからわたしを殺すま
では至らなかった。その代わり、わたしを弱体化させ、身体を幼
くするという結果に至ったんだと思う」

それがわたしの不幸、とアリーシアは言う。

僕の血を吸ったから、アリーシアは僕の力で幼くなってしまった。

そこに僕の意味はないし、血を吸ったのはアリーシアなのだけど、
どうにも罪悪感が沸いてしまう。

咄嗟に謝ろうとして、気づく。

アリーシアの不幸は、僕の血を吸って、弱体化したこと。

だったら、僕の不幸はいったいなんなんだ？

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【11】

「伊浪恭平」

アリーシアが僕の名前を呼んだ。

複雑そうな表情。

僕がアリーシアに向けていたような表情で、アリーシアは僕を見た。

そしてアリーシアは告げる。

どうしようもない現実を、突きつける。

「あなたは、人間じゃなくなった」

時が止まったと錯覚するような感覚に陥る。

頭を後ろから鈍器で思い切り殴られたような衝撃が、襲いかかる。

「……そうなんだ」

「驚かないの？」

「ううん。驚いてはいるよ。でも、なんとなく予想はついていたから」

アリーシアに血を吸われたとき。

アリーシアが吸血鬼だと知ったとき。

僕の肉体に異変が起きたとき。

可能性として、心のどこかに留めておいた。

自分が人間ではない、なにかになってしまっているかもしれないということを。

それでも、内心は穏やかではない。

恐怖はある。

不安もある。

だけど、きっとそれらを抱いたところで、僕は人間には戻れないの
だろう。

それをアリーシアの表情が物語っている。

戻れるのなら、ああも申し訳なさそうな表情はしないだろうから。

これはきっと諦めだ。

でも、それでいい。

どうしようもない現実なら、受け入れるしかない。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【12】

「それでさ、僕はいつたいたいという存在になったの？」

「あなたは、わたしの使徒、具体的に言うと、わたしのしもべに近い存在に変質を遂げたの」

なるほど。

想像通り。

あまり当たっても嬉しくないけどね。

それに苦笑していると、不思議そうにアリースアが僕を見る。

「あなたは、楽観的なのか？」

「その言い方はひどくないかな？　せめて前向きと言ってよ」

あながち、アリースアの表現も間違っではないんだけど、それを他人に言われるのは少し癢に感じてしまう。

「使徒かぁ……つまり、アリーシアと僕は主従の関係で結ばれたってことだね？」

「そうなる」

主従関係。

……なんだか淫猥な響き。ときどきしちゃうなあ。

「なに笑ってるの？」

「うっん、なんでもない」

思わずにやついていたらしい。

危ない危ない。

妄想の世界にトリップしてしまつところだった。

……使徒、か。

吸血鬼であるアリーシアに血を吸われたことにより、僕は人間ではなくなり、使徒になった。

それがどういう存在なのか、あまり詳しく理解しているわけではないけど、この身体に起きた異変は、確かに僕が人間ではない『なにか』であると告げている。

でもまあ、顔とか身体つきに目立った変化は見られないようだし、そういう点では安心していいかも。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【13】

「伊浪恭平」

「普通に恭平でいいよ」

「……恭平、あなたはどつする？」

その言葉に首を傾げた。

どつするって、それはいったいどついう決断を僕に迫っているんだ？

少なくとも、僕の目の前には選択肢らしい選択肢は用意されていない。

アリーシアの黒眼は揺らぐことなく僕を捉え続け、首を傾げる僕に選択を迫る。

「吸血鬼の使徒になったあなたは、これからどつする？」

「君と生きると言つのなら、それに従うよ？　だって君は僕の主なんでしょ？」

「わたしはあなたの主。でもわたしはあなたに強制はしない。あなたが生きたいように生きればいい。でも、使徒は主が死ぬそのときまで、死ぬことはできない。あなたはわたしが死ぬまで、死ぬことはできない。でも、わたしたち吸血鬼に寿命は存在しない」

「そうなの？」

「妖魔には存在理念と呼ばれるものがあるの。それはその妖魔の存在を支えるものであり、わたしたち吸血鬼の存在理念は『永遠』。永遠を司る妖魔であるわたしに、寿命は存在しない。つまり、あなたは半永久的に死ぬことはできないの。使徒になったそのときから、年を取ることもないし、寿命に縛られることもない。文字通り、あなたは『不老不死』になったの。それを踏まえた上で、今まで通り生きたいというのなら、それでもいい」

つまり、僕に示された道はふたつ。

アリーシアとともに、アリーシアの使徒として彼女と生きる道。

それか、アリーシアとは別れ、今まで通り、人間として、と言っても人間ではないのだけれど、普通に生きて行くか。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【14】

「せっかく道を用意してもらって悪いんだけど、もうとっくに僕は選んでいるよ」

「え？」

そう答えて、僕は呆気にとられるアリーシアの前にかしずいて見せる。

アリーシアの左手を恭しく掴む。

「僕は君とともに生きる。それが僕の選んだ道だ」

「……いいの？」

「うん」

即答して、頷く。

「僕はもう人間じゃない。君は普通に暮らしてもいいと言っただけど、

そんなことはできないよね。だって僕には死がない。君が死なない限り、僕は永久に、人間に訪れる死という制約の外に生きることになる。いつかはだれかが気づくよ。おかしいって。そうなれば、そこにはもう普通は存在しなくなる」

アリーシアは僕に二つの道を提示してくれたけど、選べるのはそのうちひとつの道だけなのだ。

二つあったとしても、もう一方を選択することはできないのだ。

僕は人間じゃないから。

だから、仕方がない。

どうしようもない。

なら、僕が選ぶ道はただひとつ。

「君がよければ、君のそばに置いてほしいな。さすがに、ひとりで長い時を生きるのは寂しいから」

笑いながら言うと、アリーシアは顔を歪ませた。

「ごめんなさい。わたしがあなたの血を吸ってしまったから……」

「ああ、ごめん。別に責めるつもりで言ったわけじゃないんだ。だから気にしないでよ」

慌てて取り繕うが、アリーシアの顔は暗いままだ。

うーん、女性の扱い方には慣れているつもりだけど、どうやら失敗してしまっただけらしい。

これはダメだ。

女性の扱い方には気をつけろ、と言い残した父さんに示しがつかない。

いや、父さんは生きているよ？

なんだか死んでいるような言い方だけど、ちゃんと生きて、海外でバリバリに働いているよ？

それはいいとして、どうにかして、彼女を笑顔にしてあげないと。

「ねえ、アリーシア。申し訳ないって思ってくれるのなら、笑ってくれないかな？」

「笑う……？ どうして？」

「僕が君の笑顔を見たいから。可愛い女の子の、可愛い笑顔が僕にとつての元気の源なんだ。だから、笑ってよ。そうして、もう気にしないで。僕を使徒にしたこと」

言っと、アリーシアは少し戸惑いを見せながらも、必死に笑顔を作ろうとしてくれた。

ぎこちない笑みに納得がいかないアリーシアは、何度も何度も、これは違う、こうでもない、なんて言葉を繰り返す。

その姿は十分に可愛らしくて、それを見ているだけでもうたまらない。

いや間違えた。元気になった、だった。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【15】

アリーシアのぎこちない笑顔を見終わって、僕たちは今後のことを話し合うことになった。

僕は改めて椅子に座り直し、アリーシアはソファに腰を下ろしたまままだ。

「アリーシアはなにか、目的があるんだよね？」

「うん」

「それはなに？」

「……お父様を探しているの」

「お父さん？」

そう、と頷くアリーシア。

「わたしの父、アレイスター・クロウリーを探して、私は日本にや

ってきたの」

「いなくなったの？」

「うん。突然いなくなったの。わたしはお父様の使徒から、お父様が日本に向かったということを聞いて、日本までやってきたの」

「探すのは大変だね。なにか他に手掛かりはないの？」

言っと、アリーシアは、

「白い薔薇がある場所だと思う」

と言った。

「白い薔薇？」

「うん。お父様は、よく、日本にある白い薔薇の草原のことを話していた。だからたぶん、そこにいるんだと思う」

白い薔薇か。それだけじゃなんとも言えないな。

僕自身に薔薇に対しての知識がないから仕方がないかもしれないけど、あまり有力な手掛かりとも言えない。

「一応、ネットで検索をしてみることにするよ。むやみやたらと足を使うよりかはまだマシだろうし」

「ねつと……？」

「知らない？ インターネット。文明の利器だよ」

うちのパソコンは父さんのものが一台ある。

父さんが海外に行ってから、それを居間に持ってきて使用している。

妹が家を出ている今、家にいるのは僕だけなんだし、僕の部屋に持っていてもいいんだけど、わざわざ運ぶのが面倒なので、そのままにしてある。

アリーシアを連れてパソコンの前まで移動する。

「この箱が、ねっど?」

「うっん。これはパソコン。パーソナルコンピューター」

答えて、パソコンを立ち上げて、インターネットに繋いでから検索エンジンを広げる。

そこに『薔薇』と打って、検索を開始する。

「ネットって言うのは、インターネットの略称なんだけど、ネットは全世界に繋がっているから、調べ物をするときとかには活用することができるんだ」

「……恐るべき、人間の科学技術……」

画面越しに映るアリーシアの慄く表情が可愛らしくて、思わず笑ってしまう。

アリーシアは不思議そうに首を傾げているけど。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【16】

表示された検索結果をいくつか覗いて見てみるけど、やっぱりいうかなんというか、アリーシアのお父さんがいる場所に繋がりそうなものはない。

次に『白い薔薇』で調べてみる。

……こちらも、あまりこれといった情報は得られない。

ふと、薔薇の花言葉が目に入って見てみたけど、関係があるようには思えない内容だった。

僕的には結構興味深い内容だったけど。

特に花言葉の辺りが。これは後々女性に送るときに使えるような知識だ。

ネットで探す、という方法は失敗に終わってしまった。

「うーん、もっと手掛かりがあればいいんだけどね」

「残念だけど、白い薔薇以上に手掛かりらしい手掛かりはない」

そっか、と僕。

すぐにも見つけてあげたいと思うけど、あまり焦る必要もない、と思う。

「吸血鬼ってことは、アリーシアと同じく寿命がないんだよね？
ということは気長に探したらいいんじゃないかな？」

僕の言葉に、アリーシアは少し顔を暗くして。

「……もう、時間が……」

「え？　なんて言ったの？」

か細い、虫の羽の音みたいに小さな声で、アリーシアがなにかを呟いた。

その声は僕には届かなかった。

だから、訊き返したんだけど、アリーシアはなんでもない、と首を左右に振るだけだった。

パソコンをシャットダウンして、時計を見る。

すでに時計の針は十二時に差し掛かろうとしている。そんなに経ってたんだ。

気づかないうちに遅い時間になってしまった。

「ねえ、アリーシア。今日はもう寝ることにしない？　アリーシアも疲れてるでしょ？」

「……うん」

浮かない顔のアリーシア。

お父さんの居場所の手掛かりが見つからなかったことに落ち込んでいるのかもしれない。

でも、今僕にできることはない。

見つかるよ、なんて確証もないことを言うわけにもいかないし、これ以上なにかを言うのは止めよう。

今日はもう休ませてあげる。それが一番いいことのはずだ。

空いているのは妹の部屋と両親の寝室か。

妹の部屋は、ダメだな。使うには一番いいんだろうけど、勘がいいあの子のことだ。

だれかが勝手に入ったなら、そのことに気づく可能性がある。

そうなった際に罵声を浴びせられるのは僕だ。

変態の次はどんな言葉で蔑まれるか、わかったもんじゃない。

ならやっぱり、両親の寝室がいいだろう。

掃除も週に一度のペースでしているし、掛け布団は押し入れにあるものを使えばいい。

アリーシアを居間に待たせて、僕は両親の寝室へと向かう。

お互いに個別の部屋を持っているため、寝室には最低限の荷物と大きなダブルベッドがひとつ。

押し入れから掛け布団を取り出して、それをベッドに敷く。

よし、これで問題はないはず。

居間に戻り、アリーシアを連れだって、再び両親の寝室へ。

「ここを使ってくれて構わないから」

「……わかった」

やっぱり、まだ浮かない顔をしているなあ。

しかし、僕にどうにかできることもない。

少し、冗談でも言ってみようか。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【17】

「もしかして寂しい？　なら、僕と一緒に寝る？」

断られることを承知で訊ねる。

「……うん」

「だよねえ……………あれ？」

嫌だ、とか、結構だ、とか。

そういう返答を待っていた僕にとっては予想外の答えが待っていた。

思わず素っ頓狂な声をあげてしまうほど意外だったため、僕はすぐに言葉を返すことはできない。

アリーシアのような可愛い女の子と一夜を同じベッドで過ごすことができるというのはとてもというかなんかなり嬉しいんだけどそれでも僕も境界線というのはわきまえているし今のアリーシアに欲情するのはロリコン認定を受けてしまうのではと思ってしまうのだけどそれでも彼女が魅力的なことには変わりはないしできれば一緒にベッ

ドで眠ってみたいという願望もなきにしもあらずといつかもうなんだか頭が爆発しそうな――

ふいに、アリーシアが僕の腕を引っ張った。

それで僕は正気に戻る。

身長差があるからだけど、見上げる形になったアリーシアの瞳に僕が映る。

「寝ないの？」

「寝ます」

欲望には逆らえない男の子でごめんなさい。

両親の寝室から僕の部屋へと移動して、僕たちはベッドに入った。

あまり大きなベッドじゃないからか、少し窮屈に感じるが、アリーシアの身体が小さいぶん、まだマシだ。

僕がベッドの奥に入り、アリーシアはその横。

もし僕が野獣のようになったときにアリーシアがすぐに逃げられるようにと考えてのことだが、自分でそういうことを考えなければならぬというのは、少し情けなく感じてしまう。

アリーシアに背を向ける形で、僕は目を閉じた。

心臓の鼓動が妙にうるさくて、なかなか寝付けない。

いろいろなことが起きて、いろいろなことを知って、いろいろ状況が変わってしまったから、それらを一度整理するためにも、睡眠は欠かせない。

無理にでも睡眠をとらないと。

脳の中を真っ白にする。

なにも考えない。

無。

なにもない。

空白を生みだす。

余計な思考に睡眠を妨げられないように。

そうしてやってくる。

眠りの時が。

案外、僕は図太いんだな……こんな状況でも、ちゃんと眠ることが……。

「……………ん？」

意識が、どうしてか戻ってきた。

なにかが、寝ちゃいけないと、そう訴えかけていた。

それがなにかはわからないけど、少し違和感がある。

背中 of 辺りの服が引つ張られている。

それは間違いなくアリーシアの手で。

「アリーシア……？」

泣いている。

アリーシアが、泣いている。

僕の声には反応しない。

だから、眠っているのかもしれない。

でも、確かに泣いている。

僕の意識が戻ったのは、そういうことなのか。

主であるアリーシアが泣いているのを放っておくことは許されないという使徒の自覚。

そういうものが本当にあるのかはわからない。

でも、今はそう思っておこう。

僕は反転して、アリーシアに向き直り、彼女の小さな身体を胸に抱きとめた。

あまりにも小さな身体。

普通の人間じゃないかもしれない。

でも、今この時だけは、アリーシアは普通の女の子に相違なかった。

髪を結うために使っていたゴムは外したようで、長い髪はまっすぐと彼女の腰辺りまであった。

それを撫でると同時に、背中も撫でてあげる。

「大丈夫。僕はここにいるから。僕が、いるから」

その言葉で、アリーシアが安らかに眠ってくれることを願いながら、僕は目を閉じた。

第二章 主VS妹【1】

目の前に、アリーシアの寝顔があった。

さて、ここで選択肢の登場だ。

いち、愛らしい寝顔を抱きしめる。

に、天使のような寝顔を抱きしめる。

さん、抱きしめる。

ここでの僕の選択肢はもちろん、そう――

「抱きしめ、ひぎゃあああああああああ！」

抱きしめようとした瞬間、全身に電気が走った。

これは本当にヤバいんじゃないの？ と死なないと言われながらも、本気で自分の命を心配してしまうほどの電流が身体を走るっていた。

これが漫画やアニメの世界であれば、僕の骨が浮かび上がって、ス
ケルトンマン状態かもしれない。

電流は数秒程度で終わりを告げ、僕は麻痺というバッドステータス
を受け、動けなくなっていた。

びりびりする……。

しかしそれも一分程度で回復した。

動けるようになって、初めにアリーシアから離れるために、彼女の
身体に触れないようにベッドから降りる。

おそらく、というか間違いなく電流の発信源は彼女だろう。

昨日は抱きしめても大丈夫だったのに、今日はダメなのか。

いや、もしかしたら、僕の邪な気持ちを気取られてしまったのかも
しれない。

本能的に危機を感じて、電流を放った……。

自分の中で答えを導き出して、とりあえず、アリーシアを放って、僕は居間へと向かった。

呼びかけて起こしてもよかったけど、昨日のことで疲れているのなら、起こしてあげるのは可哀想だ。

断じて、電流が怖いわけではない。

むしろもう一度受けたいくらい……というのは冗談だけど。

居間からキッチンに移動して、冷蔵庫の中身を見る。

買いだめはしないので、冷蔵庫の中にはあまり食材は入っていない。

そもそも、僕は料理がそれほど得意じゃないし、作ることができるのは目玉焼きとか卵焼きとか、簡単なものくらいだ。

食事はたいていバイト先のコンビニや商店街のスーパーでお惣菜を買ったりしている。

妹が家を出てからはそんな感じだ。

時計に目をやる。

六時過ぎ。

学校まではあと二時間ある。

シャワーを浴びて、朝食を作る。

それでいいか。

僕ひとりだけなら、別に朝食を抜いても構わないのだが、今日からはそうもいかない。

いつまでになるかはわからないけど、少なくとも、アリーシアの方針が定まるまではここににいることになるだろうし、それまでは朝食を作ることを心掛けないと。

アリーシアは僕の主だ。

主に不自由な思いをさせるわけにはいかない。

シャワーを浴びてすっきりしたところで、朝食作りに取りかかる。

買い置きのおパンを二枚、トースターの中に入れて、ダイヤルを回す。

冷蔵庫からはウィンナーと卵を取り出し、二台のコンロを使って、ウィンナーを焼き、卵は目玉焼きにする。

目玉焼きは、アリーシアの好みがわからないので、半熟に留めておく。

それらの調理を終えたとほぼ同時に、トースターから焼けた合図が聞こえる。

出来たものを皿に盛り合わせ、テーブルに置く。

サラダなんて優雅なものはないので、簡素な朝食だけど、仕方がない。

明日からがんばろう。

時計を見たところ、まだ時間はだいぶある。

だけど、朝食は出来てしまっているし、冷めてからでは美味しくはないだろう。

僕はアリーシアを起こすために、自分の部屋へと向かった。

一応、ノックを試みる。

自分の部屋なのにノックするのは少しおかしな気分だ。

でも、もしこの中でアリーシアが着替えているとか、そういうラッキースケベ的なイベントが発生するという恐れを鑑みれば、この行動も仕方がない。

特に、あの電流を受けてからは、あまり下手なことは出来ない。

一度のミスが、電流を誘発するかもしれないのだから。

ノックをしてから少し待ったが、返事はなかった。

まだ寝ているのかもしれない。

「入るよ」

部屋の外から断りを入れて、中に入る。

「……」

アリーシアは起きていた。

ベッドの外に脚を出して、座っている。

でも、どこか寝ぼけているように見える。金色の繊維のような長髪は爆発したように乱れていて、目は半開き。

「起きた？」

「……うん」

「ご飯を作ったんだけど、食べる？」

「……うん」

ちゃんと答えているものの、やはりどこか寝ぼけている様子に苦笑を漏らしつつ、アリーシアの手を引いて、そのまま居間へと向かう。

椅子を引いて、そこにアリーシアを座らせる。

「飲み物はどうする?」

「……牛乳」

「うん。わかった」

冷蔵庫から牛乳を取り出し、それをコップに注いでアリーシアの前に置く。

紅茶とか言われそうで内心ときどきだったんだよな。

なんとなくだけど、アリーシアからは気品を感じるし、そういう人が飲むのは紅茶だ、というちょっとした偏見が僕の中にはあったのだ。

牛乳が入ったコップを見つめながらも、なかなか動かないアリーシア。
ア。

朝は弱いタイプなのかもしれないな。

これからのために覚えておこう。

すぐにでも朝食を食べても良かったけど、僕はそうせず、昨日使ってから起きっぱなしにしてあった櫛を持って、アリーシアの後ろに回った。

昨日そうしたように、アリーシアの髪を梳いていく。

「よし」と

やっぱり綺麗だな。

さわり心地もそうだけど、見ているだけで一日は潰せそうなほど飽きさせない魅力が、彼女の髪にはある。

なんか、いいな、こういつの。

妹がいるときは、よくこうして梳いてあげたっけ。

僕の双子の妹、伊浪響子は家にいない。

彼女は僕とは違う、全寮制の女子高に通っている。

僕が通う高校とは同じ市内にあるのだけど、それでもやはり家から通うには少し遠い。

希望を出せば、自宅から通うことも許されるのだけど、響子は家を出て行くという道を選んだ。

——兄さんに襲われそうで怖いです——

そんな言葉を残して。

我ながら恐ろしい妹だ。

僕が血の繋がった妹をどうして襲わなければならないのか。

ただ、髪を梳いているときに匂いを嗅いだり、一緒にお風呂に入ろうとしたりと、あくまで兄妹間のスキンシップをはかっている間に、

気が付けば変態扱いされ、家まで出て行かれる始末。

両親不在の伊浪家の調理係りに出て行かれてしまうというのは、主に僕の食生活において大ダメージを与えた。

そのせいで冷蔵庫の中にはほとんど入っていないし、食事だってお惣菜中心。

帰ってきて欲しいという思いはあるけど、響子をそうさせたのは僕のせいみたいだし、仕方がない。

自業自得と思って、耐え忍ぶしかない。

それに、今はいなくて良かったと思える。

もしアリーシアを家に連れて帰ったことを響子に知られれば、間違いなく彼女は警察に通報するだろう。

兄が女の子を誘拐してきました、と。

響子なら間違いなくする。

そういう確信が僕の中にあるだけに、恐ろしい妹だ。

そういう意味でも、現在の響子不在の環境は助かる。

「恭平」

「……えっ？」

「どうかしたの？」

いつのまにか、アリーシアが僕のほうを見ていた。

僕はというと、櫛を持ったままで固まっていた。

「なんでもないよ。ちょっと考え事をしてただけだから」

答えてから、僕はアリーシアの対面に座った。

「考え事って、なに？」

「ん、なんでもないから、気にしないで」

響子のことは、別にアリーシアに話す必要もない。

どうせ響子が家に帰ってくるのは卒業してからのはず。

長期休暇には帰る、なんて言っていたのに、夏休みも冬休みも、春休みも帰ってこなかった。

電話すら寄越さない。

本格的に嫌われているんじゃないか、なんて疑いたくなってしまう仕打ちだ。

だから、アリーシアに響子のことを伝える必要はない。

響子が卒業して、家に帰ってくる頃には、僕たちはもういないかもしれないんだし。

「言って」

「ん？」

アリーシアは押しが強かった。

本気で心配するような目で、僕を見つめている。

思わず抱きしめそうになるのを堪えて、僕は訊ねる。

「どうしたの、急に？」

「……これからは一緒にやっていくんだし、その、言い辛いこととかも、ちゃんと欲して欲しい、から」

詰まりながら、アリーシアはそう言った。

なるほど。

アリーシアは、僕がアリーシアになにかを言いたいけど、言えないんだと思っているんだ。

考えていたのは響子のことなんだけど、おそらく、誤魔化したところ

るで、アリーシアは信用しないだろう。

それに、これからの関係を友好に、より親密にするためにも、ここで互いの間に不信感を持つのは避けたい。

しかし、アリーシアに言いたいこと、か。

……そうだ、今朝のことを訊ねてみよう。

「それじゃ、少し訊きたいことがあるんだけど。いいかな？」

「なに？」

「アリーシアって電気を扱えたりする？」

「うん……でも、どうして知ってるの？」

今朝のことを説明してみる。もちろん、僕がアリーシアに抱きつこうとしたということは割愛してだが。

「使徒を持つ妖魔は、使徒を従えるために、その身体に制裁を与え

ることが出来る。でも、それが無意識の間に行われたということとは、恭平がわたしになにかをしようとした可能性がある」

「ごめんなさい！」

即座に土下座。

「誤魔化さないんだ……」

「いやあ、おまえのいいところはバカ正直に素直なところだって評判なんだ」

「それ、たぶんバカにされていると思う」

うん、自分でもなんとなく気づいてました。

「なんていうかね、アリーシアの可愛い寝顔を見ていたら、こっ、なんだろ。わからない？ 僕のこの気持ち」

「それで伝わってるの？」

「以心伝心、電波送信中。どう？」

「無理だから」

残念、と肩を竦める。

「恭平はバカなのか変態なのか、それとも両方なのか、どれ？」

「残念ながらぜんぶよく言われるワードだよ」

僕はそう思っていないけど。

「少し主従の在り方を考えた方がいいかも……」

「僕、調教されちゃうの？」

「躰は大事よね？」

「ですよー」

……。

「本気？」

「割と」

ちよつとぞくぞくしてきた。

生命の危機的な意味で。

第二章 主VS妹【2】

「そ、それよりも！ アリーシアって電流を使えるんだよね？」

「ん、うん。使える」

無理やりだけど、どうにか話題をもとに戻すことができた。

「それも吸血鬼の力なの？」

そう、とアリーシア。

「妖魔は、大きく分けて二つの力を使うことが出来るの。ひとつは、自分の体の中に流れる力、魔力を練ることで発動する『魔術』。もうひとつは、妖魔によって持った力が異なる『権能』と呼ばれる力」

そこで一度牛乳を口に含んで、飲む。

「吸血鬼であるわたしが持つ『権能』は『支配』『吸血』『雷』の三つ。恭平を使徒にしたのは『支配』の力、血を吸うことで力を得るのは『吸血』の力、電気を司るのは『雷』の力」

「使徒は『権能』とか『魔術』とか、使えないの？」

「使えると言えば、使える。使徒は主から魔力の供給を受けるから、訓練さえすれば『魔術』は使える。『権能』に関しても、使徒は主の『権能』を引き継ぐから、使うことが出来る。恭平の場合は、主であるわたし、吸血鬼の『権能』の中で、『雷』が使える。『支配』と『吸血』は吸血鬼が使うことで効果がある力だから、使えない」

言われて、自分の手のひらをまじまじと見つめる。

力を使える、か。

『妖魔殺し』の力、『否定』は自分の意思で使えるものじゃないけど、『雷』や『魔術』は自分で使うことができる。

でも、使い方がいまいちわからない。

「どうすれば使えるの？」

「『魔術』に関しては、訓練が必要だから、すぐには使えない。でも『雷』は簡単。自分の中に流れる魔力を感じ取って、それを練る。そして放つ。それだけ」

と言われましても。

自分の中に流れる魔力。

自分ではよくわからない。

昨日もそうだったけど、僕が感じる自分の変化は身体が軽くなった、程度なのだ。

魔力がどうのこうのとかは、わからない。

出る、出る、と念じてみるが、なにも起きない。

自分の手とにらめっこをしていると、不意にアリーシアが僕の手を握った。

瞬間、ぴりりと、手のひらを電流が駆け抜ける。

「これが『雷』の力。威力は最低にしているけど、この感覚を身体の中から出すようにしてみて」

感じる電気に混じって、仄かながら、なにか、別種の力を感じる。

たぶん、それが魔力。

その感覚を感じながら、目を閉じて、自分の中の『それ』を探す。

……あつた。ごく微量だけど、感じる事ができる。

これを、搾り出すようにするんだよな。

手のひらに、温かみが現れた。

それを集めるように、集中する。

胡散しそうになるそれを決して放さないようにして、自分の中から魔力を絞り出す。

「うん、その調子」

アリーシアの声が聞こえたような気がするけど、それを気にしてい

ると、せっかく練った力が散ってしまいそうなので、あくまで練習することに集中する。

.....あれ？

「恭平？」

アリーシアも気づいたようで、僕の名前を呼んだ。

「消えた？」

呟いて、手のひらを見る。確かに、僕は魔力を練っていたはずだ。

手のひらに残る少しの温かみがそれを証明している。

しかし、そこにはもう力はなかった。

途中までは上手く練れていたはずだ。

集中もしていた。それがなぜか、急に突然、消えてしまった。

「……妖魔殺しの影響かも」

アリーシアが僕の手を握ったまま呟いた。

「どういうことなの？」

「恭平の妖魔殺しが『否定』だっていうのは話したよね？ おそらくけど、恭平の中で練られた魔力が、『否定』の干渉を受けたんだと思う」

つまりは、なんだ。

「僕は『雷』の力を使えないってことなの？」

「そうとも言い切れない。途中までは上手く練れていた。だから、ある程度、魔力が高まれば、それに『否定』が干渉するってことだと思う」

「使えるには使えるけど、力の使用に限度があるってこと？」

たぶん、とアリーシアは頷いた。

「消える寸前の力の具合からして、大した威力は期待できない。効果範囲も、直線でメートルあるかないくらい」

なんというか、改めて考えてみれば、僕ほど使徒に向かない使徒も珍しくはないんじゃないのかな。

主を弱体化させるわ、権能で行使できる力はさして役に立たないわ、踏んだり蹴ったりだ。

「うーん。どうにかして使えないかな」

「諦めた方がいい。『妖魔殺し』は妖魔の力に対して優位権を持つし、捨てようと思って捨てることができる力でもない」

「ダメか……」

「わたしの力も弱体化しているから、それほど威力はないけど、あなたよりはまともに力を使えるから。もし《狩人》に襲われでもしたら、そのときはわたしが戦うから」

「《狩人》？」

聞き慣れない単語に首を傾げる。

「……それについては追々話すことにする」

「うん、わかった」

「……追及しないの？」

「無理やり女の子から聞き出すっていうのは、僕のポリシーに反するからね。いつかは話してくれるんだから、いいよ。それに――」

僕たちには長い時間があるから、という言葉を口にしよつとして、止めた。

「それに？」

「朝ごはん、冷めちゃうから」

用意してあった朝食はすでに冷め始めているけど、ほんのりとした温かみは残っている。

我ながら、上手い逃げ方だと思った。

アリーシアも疑わず、うん、と答えた。

危なかった。

また、アリーシアに暗い表情をさせるところだった。

アリーシアは、少なからず、僕を使徒にしてしまったことに対して罪悪感を抱いている。

それは、僕が気にしないで、と言ってもだ。

だから僕は極力、人間としての時間を失ってしまった、と思わせるような言動は控えるように決めたのだ。

アリーシアの笑顔は見たいけど、暗い表情は見たくないから。

第二章 主VS妹【3】

朝食を食べ終えて、僕は制服に着替えた。

使徒になったと言っても、学校には行かないと。

あまり休み過ぎると、海外に居る両親、ではなく、どうしても響子の方へと連絡が行ってしまうのだ。

わざわざ僕の学校にやってきて、私が保護者ですから、なんて言っ
て、担任に連絡先を渡していた去年の春先が思い浮かぶ。

先生もびっくりしてたよな、伊浪の妹さんとは思えないって。

……あれ、今思い返してみれば、僕あるときバカにされてたのかな
？ まあいいや。

着替えを終えて、鞆を持って居間に向かうと、アリーシアがテレビ
をじーっと見ていた。

「なにか面白い番組でもやってる？」

「恭平……箱の中に人がいる……この人たちは箱の中に閉じ込められているの?」

テレビの中であの政治家はダメだ、とか、日本を立て直すにはこうするしかない、とか持論を展開するコメンテーターと引きつり顔でそれを聞く司会者が映し出されたテレビを見ながらアリーシアが訊ねた。

パソコンのことも知らなかったアリーシアだけど、まさかテレビのことまでも知らないとは。

「これはテレビって言ってね、家の屋根に取り付けたアンテナで、発信されている電波を受信して、それを流し出す機械なんだ」

「電波……そういえば、さっきからなにかの電波を感じるとは思っていたけど、これのことだったのね」

「アリーシアってそんなこともわかるの?」

「一応、『雷』を司る妖魔だから」

テレビを見ながら答えるアリーシア。

見たこともない文明の利器に釘付けになるアリーシアの姿は可愛い。

後ろから抱きしめたくなる。

でもそうすればおそらく僕は電流制裁の刑を受けてしまったらう。

……諦めよう。

いつか、再びこの手にアリーシアを。

その誓いを胸に抱いて、今日は諦めることに。

「っと、そうじゃなかった。アリーシア、僕は学校に行ってくるから」

「学校？ 恭平は学校に通っているの？」

「うん。現役の高校二年生だよ」

どうやら学校については知っているらしく、僕の姿をまじまじと見

つめている。

僕が着ているのは学校指定の制服だ。

黒のブレザーに、下も黒のズボン。どこにでもあるような、普通の制服だ。

「かつこいい?」

両腕を広げて、「冗談混じりに訊いてみる。

「そこそこ」

「ははっ、手厳しいね」

素っ気なく答えたアリーシアは、すぐにテレビへと視線を戻してしまふ。

どうやら、現在のアリーシアの関心事はテレビらしい。

まさかテレビに負ける日が来るとは思わなかったなあ。

そうしている間に、家を出る時間が訪れていた。

「アリーシア、お昼はどうする？ 必要ならお金を渡しておくけど」

「いない」

その代わり、とアリーシアがソファから降りて、僕のところまでやってくる。

「屈んで」

「ん？」

疑問に思いながらも、言葉通りに屈む。

ちょうどアリーシアと同じ頭の高さになって、おもむろに彼女は僕のネクタイを緩ませ、ブレザーのボタンを、そしてその中のカッターシャツのボタンを上からひとつふたつ外す。

な、なに？ このちよつとときどきな展開。

そして近づく、アリーシアの顔。

ちょっと待って。

僕にはまだ心の準備が――

「っ！」

アリーシアの牙が、首筋に突き刺さる。

そして抜かれていく血。

今度は抵抗することもできたけど、そうはしなかった。

おそらく、これは僕の役目だから。

アリーシアの使徒たる僕の。

一分にも満たない吸血を終えて、アリーシアは僕から離れた。

「吸うなら吸うって言って欲しかったよ」

言いながら、ティッシュを何枚か手に取り、首筋に当てて、漏れ出した血を拭う。

おかげで僕の心臓はばくばくで、今にも飛び出してしまいそうになっている。いやほんとに。

「気にしない。これだけ吸えば、たぶんお昼は抜きでも大丈夫。わたしたち吸血鬼の食事の主体はやっぱり血だから」

「そう？ それはいいんだけど、大丈夫なの？」

「なにが？」

「僕の血を吸って、だよ。また『否定』の力を受けるんじゃないの？」

「それは大丈夫。すでにわたしの中にはあなたの力に対する抗体が作られているから、『否定』の力を無力化して、血だけを得ることができる」

そうなんだ、と僕。

そういえば、アリーシアは僕の『否定』の力は弱いつて言ってたしね。

「ん？　だったらどうして小さいままなの？」

「抗体はあくまで『否定』の干渉を受けないようにするだけ。すでに起きてしまった事象に関しては効果が働かないの。こればかりは、地道に力を取り戻していくしかない」

うーん、すぐにもアリーシアの元の姿を見たかったんだけどな。

今の姿も悪くはないんだけど、いささか子供っぽさが強過ぎる。

やっぱり、僕としては今よりもいろいろなところが成長していらっしやるご主人さまのほうがなにかと……。

「恭平、目がいやらしい」

「おっと失礼」

欲望が目に見れてしまっていたらしい、これは危ない。

つと、そろそろ時間がまずい。

乱れた服装を正して、鞆を持つ。

「それじゃ、アリーシア。行ってくるね」

「うん」

「家にだれかが来ても、対応しなくていいから。放っておいて。それと、外に出るのなら、テーブルに置いてある鍵で戸締りをしてね。四時過ぎには帰るから、それまでに帰ってきてくれると助かる」

家の鍵はふたつ。

ひとつは僕が持っている鍵。これはアリーシアのために置いていく。

もうひとつはここにはない。響子が持っているからだ。

だから僕はアリーシアが家に居てくれないと、玄関の前で待ちぼうけをくらうことになる。

「わかった」

と、アリーシアは頷いて答え、ソファに戻る。

「それじゃ、行ってきます」

「……恭平」

「ん？」

「行つてらっしゃい」

「……うん」

響子家が家を出てからなくなっていたこのやりとりが、少しだけ懐かしかった。

第二章 主VS妹【4】

アルバイト先のコンビニを出て、家へと戻る。

僕はアルバイトを辞めた。店長には引きとめられたけど、家庭の事情なので、という理由で押し通した。

アリーシアの使徒になっちゃったので仕方ないですよええ、なんてことは言えないからね。

アリーシアの使徒となった以上、極力時間に縛られることはしない方がいい。

学校は仕方がないとしても、アルバイトは元々絶対にやらなくちゃならないというわけでもなかったし。

ただ単純にコンビニに訪れる女性客を見たかった、っていう理由だしね。

なかなか不純な理由だっただけに、辞めることに未練はなかった。

というか、今はアリーシアを愛でるのに忙しいし。……電流制裁に

怯えながらもただ。

携帯を取り出して時間を確かめる。四時を少し過ぎたところ。

アリーシアが僕の言いつけを守ってくれているのなら、家にいてくれているはず。

そう思って、玄関のノブをそのまま引いてみる。

がちや、つと遮られることなくドアは開いた。うん、どうやらいるみたい。

「ただい……ま？」

足を踏み入れて、気づく。

見慣れない靴がある。いや、訂正。

一年以上見ていなかった靴が、玄関にある。それは間違いなく、彼女のものです。いやいや、でもそんなわけあるはずがない。

だって、一年以上家に帰ってきていなかったんだぞ？　だということに、なんでこのタイミングで――

「まずい！」

そう思って居間に駆けこんだときには、すでに手遅れであった。

「……」

「……」

そこは確かに、修羅場だった。

ソファに座る我が主、アリーシア・クロウリー。吸血鬼。

かたや、アリーシアを見たまま立ち竦む我が妹、伊浪響子。人間。

そして最悪の状況に今にも逃げ出したい僕、伊浪恭平。使徒。

その三者が居間にそろって、沈黙という無言の圧力により支配されていた空間が弾けた。

「恭平、彼女はだれ？」

「兄さん、彼女はだれですか？」

同時に訊ねられて、どう答えていいものが困る。

アリーシアは、説明しにくい。どう表現していいものか、わからない。

だから僕は、

「アリーシア、彼女は僕の双子の妹なんだ。響子っていうんだけど」

「そう」

興味がないと言いたげに、アリーシアは捨てるように言った。

「兄さん、私の質問にも答えてください」

「いや、その前に、だ。どうして響子が帰ってきているんだ？」

「私だってたまには家に戻ります」

「一年以上帰ってきていなかったのに？」

響子の眼鏡がキラリと光る。

な、なんだ？

「そんなことよりも、兄さん、私言いましたよね？
誘拐はダメだ
と」

やっぱりこうなったあああああああああ！

予想通りの展開に脱力してしまう。

いやわかっていただけ。

だからこそ帰ってきて欲しくなかった。

なのに狙ったかのようなこのタイミング。

ぺたん、と床に座り込んで、仁王立ちする妹を見上げた。

僕と似た顔つきに黒い縁の眼鏡、そしてアリーシアと同じくらいの長さの黒髪。彼女が通う女子高のセーラー服はとてもよく似合っていて、すらりと伸びた綺麗な脚はモデル顔負けだ。

別に身内鬚眉をしているわけじゃない。響子は可愛い。人目に見ても、だれもが頷くはずだ。

いや、今は、それはどうでもいい。

「大丈夫、兄さん」

「えっ？」

座り込む僕の肩に、響子の手が置かれる。

「人生はまだこれからです。私が一緒にやり直してあげますから、ちゃんと償いましょう?。」

「冤罪だ！」

「嘘はダメですよ、兄さん。兄さんの女性好きを一番近くで見てきた私だからわかります。兄さんはやるときはやる男」

「その理解のされ方は嬉しくないよ！」

確かに女性は好きだけど。でもちゃんと境界線は引いてるから。ちゃんと犯罪にならない程度にしているから。

というか妹にそんな風に思われていたことが、一番ダメージがきつい！

「あまり、苛めないで」

不意に、アリーシアの声が響き渡った。

その声に、僕と響子はソファを見る。

アリーシアはテレビを見たままで、僕たちの方を向いていない。

「わたしはなにも、恭平に誘拐されたわけじゃない。わたしは恭平

に助けられただけ」

「そ、そう！ そうなんだよ！」

「気安く兄さんの名前を呼ぶな」

「ひいつ！」

黒いよ！ 響子が黒いよ！ 思わず言われてもいない僕が怖がつちやうほどだよ！

しかし、アリーシアはそんな響子に怯えを見せない。いやまあ、相手は妖魔で吸血鬼なアリーシアなわけだし。

「わたしがだれをどう呼ぼうかなんて、あなたに縛られることじゃない。恭平を恭平と呼ぶのはわたしの勝手」

「また、呼んだ……」

響子の歯ぎしりが聞こえて、僕は慌てて立ち上がる。

「お、落ちついてよ、響子！ らしくないじゃないか！」

いつも冷静に僕を罵倒する響子が、アリーシアに対して異様なまでに敵意をむき出しにしている。こんな彼女、僕は知らない。

なにが彼女をそうまでして苛立たせているんだ？

わからないから、訊ねるしかない。

「響子、どうしたんだよ、いったい？」

「兄さんは黙っていてください」

「そうはいかないよ」

アリーシアを睨みつける響子の前に立ちはだかる。

「響子、彼女が君になにかをしたのか？ 君をそうまでして怒らせるようなことをしたのか？」

響子は答えない。

だけど、わかってしまう。

僕たちは双子で、生まれたときからずっと一緒だったから。

「なにもしていないのに、そういう態度は許せないな。僕に対してならいいよ。でもね、それを他の人にはダメだよ。それだけは、僕が許さない」

響子は間違っている。彼女の態度は理に適っていない。だから僕は立ちほだかる。

僕たちはそうしてきたから。どちらかが間違ったことをすれば、それをどちらかが正す。僕らはそういう兄妹なんだ。ずっとそうやってきた。

響子もそれを知っているから、なにも言えない。口を閉ざして、僕を睨みつけることしかできない。

眼鏡の奥の瞳に込められた感情は怒りだ。

でも、その怒りが向かっているのは僕じゃなくて、アリーシアだっ

てところがよくわからない。

第二章 主VS妹【5】

だけど、響子は引かない。

一歩前に踏み出して、僕とぶつかるほどの距離までやってきて、僕に言う。

「どいてください、兄さん」

「それはできないよ。君がちゃんと話してくれない限りね」

「どいてください!」

「響子!」

互いに怒声を飛ばし合いながら、睨み合う。

僕は無意識に、響子の肩を掴んでいた。

「君が理由もなしに、理不尽に怒ることはないって僕は知っている。だから、教えてよ。なにが、君をそうまでさせる? どうして、な

にもしていないアリーシアに、それほどの怒りを感じているんだ？」

「……………か」

ポツリと、響子の口からなにかが零れた。

「え、なに？」

彼女がなにを言ったのかを聞き取ることが出来なくて、僕は訊ね返した。

そして、響子は、僕の目を見て、言う。

「使徒って、いったいどういうことなんですか？」

目の前が、真っ暗になった。

どうして、そんな言葉が響子の口から零れるのかが理解できない。わからない。知らないはずなのに。

響子の言葉に、なにも言えなくなった僕は、アリーシアの電流制裁

を受けて麻痺状態に陥ったかのように、固まった。

僕は今、どんな顔をしているんだろう。たぶん、恐ろしいほどに動揺した顔をしているんだろうな。

それだけで、気づかれる。

これからは、嘘も誤魔化しも通用しない。

響子が、僕のネクタイを掴んで、僕を思考の淵から連れ戻す。

「人間じゃないって、どういことなんですか？」

「……」

響子の顔が眼前に現れて、僕は思わず彼女から目を逸らす。

ただひとつ、言葉に出来たことはとても情けなくて。

「どうして、君がそれを……？」

アリーシアが話したとは思えない。僕だってもちろん、話してなんかない。だからわからない。

どうして響子が、使徒のことを、僕がもう人間じゃないってことを知っているのか。

そんな響子が、僕になにかを突きつけた。それは小型の黒い機械で、中心部分にはスピーカーのようなものが見える。

「兄さんには黙っていましたが、この家には盗聴器が仕掛けられています」

「えっ」

ですが、と響子。

「それは海外に行った父さんが、わたしたちの安全を考えて、設置していつてくれたものです。わたしは家を出るときに、その盗聴器の存在を明かされ、管理を任されていたのです」

父さんたちが海外に行ったのは僕たちが中学生になって間もないころだった。

まさか、そんなときから盗聴器を設置されていたなんて、知らなかった。

それが、僕たちが高校に進学してからは、響子が管理していた。ということは、この家出のすべての会話は、すべて筒抜けだということになる。

そうか、だから、響子は知っているんだ。

昨日、僕の身のに起きたすべてのことを。

納得すると同時に、僕は逃げ場を失った。

決定的な証拠を響子は持っていて、もうどうしようもない。

なら、言うしかない。

僕の口から、響子に告げるんだ。

それがたぶん、響子の兄『だった』僕がしてあげれる、最後のことなのだから。

「響子、僕は……」

響子は黙って、僕の言葉を待っている。

唇が震えた。

だけど、僕ははっきりと、それを口にする。

「僕は、人間じゃない」

言った瞬間、響子の手がネクタイから放れて、重力に逆らうことなくだらりと垂れ下がる。

持っていた盗聴器が、カタンという音を立てて、床に落ちる。

言ってしまったら、もう止めることは出来なかった。

「人間だった僕は、もういない」

次から次へと、喉の奥から言葉が溢れ出てくる。

「僕は昨日、そこにいるアリーシアの、吸血鬼の使徒になった」

響子がすでに知っていることも、ぜんぶ言っ

「年を取ることも、死ぬこともない、不老不死の存在に、成り果てた」

言い終えて、最後にもう一度、告げる。

「僕はもう……人間じゃない」

そして、終わった。

僕を見る響子の眼鏡の奥に、光る雫が見えた。それは響子の頬を伝って、床へと零れ落ちる。

垂れ下った腕を伸ばして、僕のブレザーを、響子は掴む。

「……………どうして、そんな……………」

掴んだ手に力が込められる。

「兄さんが、どうしてそんなことにならなくちゃ、いけないんですか……………」

「響子……………」

抱きしめようか迷って、結局僕は伸ばした腕を彼女の背中に回すことは出来なかった。

僕は、それをしていい存在じゃない。

響子の兄としての記憶も経験も思い出もある。

でも、僕は変わった。変わってしまった。

姿も心も変わっていない僕だけれど、でも確かに変わっている。

人間から、使徒へと。

そんな僕に、響子を抱きしめる資格なんて、ない。

「兄さんは、兄さんは、人間ですよね……？」

涙を流しながら、響子が懇願するように僕を見上げた。

無駄な問答だった。

響子もう知っている。たとえここで僕が、そうだよ、僕は人間だよ、
と言っても、その言葉に意味はない。

わかっているのに、それでも響子が訊ねてくれるのは、それが響子
の優しさだからだ。

彼女は僕を人間だと言おうとしている。

僕が自分を人間だと言えば、彼女はそれが嘘だとわかっているけど、
僕を人間として扱ってくれるだろう。

だけど、そんな優しい彼女だからこそ、僕は彼女を優しさを否定する。

「響子、僕は、人間『だった』んだ。もう、人間じゃないよ」

最後の一撃だった。真正面から打ち砕いた。

そして、響子は。

「つく！」

僕の胸を強く押して、居間を飛び出した。そして、そのまま家を出て行った。

僕はその後を追わなかった。僕にはその資格はない。僕はもう、響子の兄じゃない。

僕は、アリーシアの使徒なのだ。

多くを望む者は、ただのひとつすら得ることはできない。

僕はもう選んだのだから。迷いはしない。

第二章 主VS妹【6】

「いいの？」

アリーシアが僕を見ていた。

昨日のように、申し訳なさそうな顔で。罪悪感に満ちた表情で。

「響子には嘘は通用しないからね。それに、いずれは気づくことだ。知るのが早いか遅いかの違いで、いずれは知るんだ」

僕はたまらず、アリーシアの手を握っていた。

両膝について、懇願するように、彼女のそれを頬に押し当てた。

「僕はもう、ひとりだ。僕には君しかいない。だから……僕をひとりにしないでくれ……」

「……うん」

ソファから降りたアリーシアが、僕の頭を胸に抱えた。

頭を撫でる手つきは優しく、母のそれを思い出させる。

「そばにいる……だから」

——泣かないで。

これはいつたい、なんの涙だろう。

人間じゃなくなったこと？

使徒になったこと？

響子に知られてしまったこと？

アリーシアに縋ってしまったこと？

僕には、その答えはわからなかった。

第二章 主VS妹【7】

翌日。

目覚めた僕の隣に、アリーシアはいない。

昨日は僕が慰められる立場で（決して卑猥な意味ではない）ベッドに入ったのだけど、どうやらアリーシアは僕より早く起きたらしい。

なにやら、外の方からにぎやかな音が聞こえてくる。

それに、仄かにみそ汁の香りもする。

アリーシアが料理を？

出来るようなイメージはなかったけど、人は見かけによらないな。いや、人じゃないけどさ。

とりあえず、ベッドから這い出て、部屋を出る。

どこか懐かしいみそ汁の匂いに誘われて、そのまま居間からキッチン

ンへ。

「おはようございます、兄さん」

「……ああ、おはよう、響子」

「ほら、味見してください。久しぶりだから、鈍っているかもしれないので」

「……うん」

半分眠ったままの僕はよくわからないまま、持たされたなにかを口に運ぶ。

「響子！　って熱っ！」

驚くと同時に口の中に侵入してきたみそ汁が舌を襲う。

「なんですか、朝から大声を出して。もしかして発情期ですか？」

「ひ、ひらっひょー！」

「ああ、兄さんは万年発情期でしたね」
ああ、否定したい。

というかいろいろ言いたい。

でも舌の火傷がそれを許さない。

水道の蛇口を捻って、舌を水で冷やす。それを十秒くらい続けていると、舌の痛みは消えた。

これも、使徒の力なのかもしれない、と思いながら、それは放っておいてと、響子を見る。

見れば、響子はセーラー服の上にエプロンを身につけて、確かにそこにいた。

「ど、どうして君が……？」

「学校に許可を取って、自宅通いにしてもらいました。うちの兄が、妹がいないと生きていけない、って泣いているので、と」

「身内を貶めるような嘘は勘弁してよ！」

「冗談です。家の都合としか言っていないせん」

ほっ、と安心する。向こうの女子高には何人か知り合いがいるので、その子たちにまで誤解をされるような羽目に遭うのは男の子として少し……。

「いや、待て。別に学校の許可とか、そういうのはどうでもいいんだ！」

「だったらなんですか？」

「……響子、僕は——」

「兄さんです」

僕の言葉を遮って、響子は言う。揺るぎない一言。力強い言葉で、僕の言葉を遮った。

「使徒だとか、妖魔だとか。そんなことはどうでもいいですし、私には関係ありません。たとえば、兄さんが人間じゃなくなったとしても、この際どうでもいいです」

「いや、そこは割と気にして欲しいところなんだけど……」

「兄さんは、兄さんですから」

言い切って、響子は僕に背を向けて、みそ汁の入った鍋をかきまぜ始めた。

僕が言うのもなんだけど、図太い。うん。さすがは僕の妹というところか。いや、褒めていいのかどうかよくわからないところだけど。

「これからは私が兄さんたちのご飯を作ってあげます」

その代わりに、と響子。

「卒業するまでは、ここにいて。それまでは一緒にいて。……お願いだから」

願う響子の声は、震えていた。

だけど、僕はそれに答えかねる。それを決めるのは僕じゃないから。

僕はあくまでアリーシアの使徒なのだ。彼女がここを離れるとなれば、僕はそれに付いていく。

だから、僕の一存ではい、と頷くことはできない。

「わかった」

「え？」

背後からの声に振り返る。

そこにはアリーシアが立っていた。昨日同様の爆発頭で。

「だから、恭平が卒業するまで、ここにいればいいんでしょう？」

「そ、そうだけど、いいの？」

「うん。どうせ当分は日本にいるつもりだし」

アリーシアの目的は日本にいる父親を探すことだから、日本にいるのは当然のことだけど。でも、まさか了承するとは思っていなかった。

「……感謝はしません」

「しなくてもいい。わたしが好きでここにいるだけだから」

二人は顔も合わせることなく、そう言った。

……険悪なムード漂う二人の間に立たされた僕はどうすればいいんだろう……。

「恭平」

「え、なに？」

「髪」

自分の爆発頭を指差して、アリーシアは言う。

それで気づく。

「ああ、そういうことね」

理解した僕は、櫛を戻した洗面所まで行って、そこに映った自分の顔を見る。

響子が戻ってきてくれて嬉しいのか、それともこれからのことを大変に思っているのか、よく判別できない顔が、そこには映っていた。

第三章 狩人襲来、そして……【1】

響子が家に戻ってきてから、数日が過ぎた。

「いつも家にいるのなら、洗濯くらいしたらどうですか？」

「洗濯機をショートさせてもいいのなら、やってもいいけど？」

「弁償してくれるのならそれでも構いません」

「生憎と、金銭の類は持ち合わせていない」

「あの、もうちょっと友好的にしてくれないかな？」

休日の朝から睨みあう二人を見て苦笑する僕。

アリーシアと響子は仲が悪い。

というか、相性がとてつもなく悪い。

いや、言ってしまえば、響子が勝手に突っかかっているだけなんだけど。

たぶんそこには、アリーシアが僕を使徒にしただとか、そういうこととは関係ないんだと思う。

「兄さん、主の教育はちゃんとしてください」

「いや、主を教育するのはダメじゃないかなあ」

「どちらかといえば、わたしが恭平を教育する立場」

「是非とも教育していただきたいところです！」

そう答えてアリーシアに抱きつくこうとすると――

「ひぎゃあああああああああああ！」

アリーシアから放たれた電流が僕を襲う。

電流制裁の存在を忘れていた……。

電流に襲われた身体は麻痺し、背中から倒れ、床に激突する。

「恭平も懲りない」

「君の魅力の前には、僕の理性はないにも等しいんだよ……」

「はいはい、兄さん、どいてくださいね。存在しているだけで邪魔なんですから」

「ひどくないかな……それとさも当然のように踏まないでね」

「スリッパ履いてるじゃないですか」

そういう問題じゃないんだけど。

伊浪家に復帰した響子は、家事全般を担当してくれていた。

ずぼらな生活をしている僕を叱責した上で、家事の権限を掌握し、僕は彼女に逆らえない。というか、もともと逆らえないんだけど。

でもまあ、響子は料理も得意だし、帰ってきてくれたのは素直に喜ぶことが出来る。

それに、響子が妖魔殺しの所持者じゃないってこともわかったし。

妖魔殺しに遺伝性はない。あくまで後天性ということだそうだ。

床に倒れる僕の腹を踏んで、洗濯物を運ぶ響子は朝から忙しい。朝食を作って、洗濯をして、それから買い物。

僕たちの両親は僕たちが中学生のときに仕事の関係で海外に単身赴任して以来、家に帰ってくるのは年に数回となっていた。

だから、本人は中学のときに慣れたというけど、養われる立場である僕からすれば、少し罪悪感を覚えてしまう。

だからといって、兄を無下にするような態度を許すわけじゃないけど。

「響子、せっかくの休みなんだ。遊びに出掛けないか？」

「デートのお誘いならお断りします」

「断らないでよっ！」

「本当にデートのお誘いだっただんですか……」

洗濯物をたたむ響子は呆れ顔で僕に言う。

響子と最後に出かけたのはもう一年以上も前のことだ。それまではよく一緒に出かけていたというのに。兄としては少し寂しい。

「遊びに行こうよー」

「駄々をこねても無駄です」

床でバタバタと暴れてみたけど、ズバツと斬られる。

素っ気ない妹の素振りに、少し興奮……いやいや、ないない。さすがにそこまで変態じゃない。そもそも変態じゃないけど。

しかし、響子の様子を見る限り、なにを言っても遊びに出かけそうにない。

忙しいのはわかるけど、息抜きをするのも大事だと思うんだけどな。

そうすると、暇な僕はどうすればいいだろう。

響子は遊んでくれないし。

そこで、ソファに寝転んで、テレビに流れるアニメを觀賞しているアリーシアを見る。

アリーシアはテレビにご執心になっていた。

我が家にやってきてから、ほとんどの時間を、ソファに座って、テレビを見て過ごしている。

本人曰く、どのチャンネルも別のものを放送しているので退屈にならない、とのことだそうで。

今彼女が見ているのは、僕がレンタルショップで借りてきたアニメだ。

二足歩行のアニメチックな動物たちのほのぼのとした日常が描かれている子供向けアニメだったのだが、意外なことに、アリーシアは

これを気に入ってくれた。

彼女が纏う雰囲気上、こういう子供っぽいのはダメかな、とも思いましたのだが、気に入ってくれたので良かった。

そんなアリーシアに、

「ねえ、アリーシア。僕と遊んでよ」

と言うと、

「そんなに電流が好きなの？」

と、テレビから目を逸らすことなく彼女は言う。

「あのね、僕だっていつも邪な気持ちを抱いて君に接しているわけじゃないんだよ？」

「本当に？」

「本当だよ。たまに抱きしめたくなるけど」

偽りない本心を告げると、アリーシアが僕を振り返る。

「変態」

「……なんで？」

「兄さんはバカ正直にもほどがありますね」

アリーシアの言葉に首を傾げる僕に、響子がやれやれ、と首を左右に振った。

響子は洗濯物をたたむ手を止めて、正座のまま僕を見る。

「兄さんは少し、嘘をつくということを覚えたほうがよろしいかと」

「いや、響子。それはダメだ。父さんが、男というものは、女性に對しては紳士、そして真摯であれって言っていたからね」

「父さんは変態じゃないからいいですけど、兄さんのように変態の男性が真摯でいるのは少し問題があると思います」

そうだろうか。

というか、僕が変態だということを前提として話が進んでいるのはなぜだろう。

第三章 狩人襲来、そして……【2】

「兄さんは容姿だけは誇れるんですから、それを上手く活かせばよいのでは？」

「待つて。『だけ』ってなに？ 僕はそれ以外に誇れるところは無いの？」

「逆に訊きますが、あるんですか？」

「よし、僕の容姿の活かし方を教えてもらおうか」

「情けない」

アリーシアの毒舌が胸に突き刺さったが、無視しよう。

「ですから、さっきも言ったように、嘘をつけばいいんですよ。兄さんは基本的に欲望が駄々漏れ過ぎるんです。だから女性をドン引きさせるんです」

「えっ、僕ってドン引きされてたの？」

「現にアリーシアさんがドン引きしてましたけど？」

がーん！

ショックだ。まさか、ドン引きされてたなんて……。

確かに、嘘をつくようなことは出来るだけ避けてきた。

だって父さんの教えがあつたし、それに、女性にはいつだって本心で接したいという僕の気持ちもあつたから。

だから、自分の欲望のために嘘をつく、なんてことは今までしてき
たことがなかった。

しかし、まさかそのせいでドン引きされていたなんて……。

それでも交際経験はないながらに、数多くの女性と親しくしてきた
つもりだったが、まさかその全員が僕に対して、そうだったという
ことなのだろうか。

「じゃ、じゃあ、僕が今まで触れあってきた女性たちも……」

「触れあつてきた……？」

僕の言葉の一部分に、響子が反応を示した。

……しまった。

「その話、詳しく聞かせていただきましょうか？」

「ナンノコトカナ？」

「アリーシアさん」

「ん」

響子に呼ばれたアリーシアが頷くと――

「ひぎゃあああああああああああああああ！」

なにもしていないのに襲い来る電流に絶叫を上げる。

床の上に倒れた状態のままだったので、そのまま床をのたうちまわることになってしまった。

「な……なんで？」

電流から解放されて、アリーシアを見上げると、そこには変わらずテレビを見るアリーシアの姿がある。

「あまり、遊びが過ぎるのはどうかと思う」

「待つてよ、アリーシア。僕は遊びで女性と触れあったことはないよ。いつだって僕は真剣だ」

「アリーシアさん」

「ん」

「ちょっと待つて。その合図はまさか——ひぎゃあああああああああああああああ——」

第三章 狩人襲来、そして……【3】

「ほう、ただの一年の間に、ずいぶんと女性の知り合いが増えたようですね、遊び兄さん？」

「……」

響子に携帯を奪われた僕は、床の上で正座をすることを強いられていた。

響子が見ているのは、僕の携帯の電話帳だ。

そこには僕の知り合いの女性陣の連絡先が数多くある。……たぶん、百人くらい。

自分の失言から墓穴を掘ってしまったわけだけど、汗が止まらない。

僕は俯いたまま、僕を見下ろすアリーシアと響子を見ることができない。

この状況下で、軽蔑のまなざしを向ける女性の視線に耐えられるほどのメンタルを持ち合わせてはいなかった。

「それで、兄さん、最近遊んだのはどの子ですか？」

「……最近はバイトが忙しかったから、どの子とも遊んでません」

「アリーシアさん」

「ま、待って！ 本当だから！ 本当に遊んでないから！」

電流制裁の合図を察知して、慌てて否定する。というか、どうしてこういう時だけ結託するんだ。

これは嘘じゃない。本当に遊んでいないのだ。

僕のその様子に、響子はふむ、と声を漏らすと、僕に携帯を渡す。

「えっと……許してくれるの？」

ぎこちない笑みを浮かべる僕に、響子は満面の笑みを浮かべて答える。

「消してください」

「……一応訊くけど、なにを？」

「電話帳。私以外の女性の連絡先を」

ああ、これほどまでに満面の笑みを浮かべる響子を見るのはいつ以来だろう。

あれは……そう、僕たちが中学生のとき、僕が誤って響子が入浴中の浴室に入ったとき以来だ。

あのときは、今のような満面の笑みを浮かべながら頬をおうふくビントアしてきたんだっけか……。

そのときと同じということは、これはかなり怒っている。響子の満面の笑み。鬼の形相ということなのだから。

僕は恐る恐る携帯を操作する。

「ああ、それと、バックアップは取らないでくださいね。そうした

場合は携帯ごと破壊しますから」

その言葉に思わず指が止まる。

携帯画面に表示されている『バックアップを保存しますか?』という問いに対して、決定キーを押そうとしていた指だ。

さすがは我が妹。僕がバックアップを取ることはお見通しか……。

見通されているのは仕方がない。僕はキーを操作して、電話帳から女性の連絡先をまとめているグループを呼び出す。

画面に浮かぶ、『消去しますか?』という問い。それは僕が僕自身に訊ねている問いでもある。

ここで消してしまえば、僕はもう彼女たちと連絡を取ることはできない。

僕の携帯は登録されていない連絡先からの電話もメールも受け付けないようになっていたから。

だからこれは、実質彼女たちとの別れを示している。

「……」

「兄さん」

ああ、妹が微笑んでいる。

僕はその笑顔に微笑み返して……。

ポチ。

決定キーを、押した。

さようなら、女子大生の八重さん。

さようなら、隣のカフェでバイトしている恵ちゃん。

さようなら、大手企業の社長秘書をしている麻美さん。

みんなみんな、さようなら。

「どうして泣きながら笑ってるの？」

「変態だからですよ」

なんとも言ってくれこんぢくしょう。

第三章 狩人襲来、そして……【4】

女性たちとの繋がりや失った携帯を握りしめ、僕は涙を流しながら笑っていた。

「兄さん、私が家を出てから、女性遊びが悪化してますね。なんですか、高校生だからはしゃいでやるぜいえー、みたいな感じですか？」

「違います……元はと言えば、響子のせいでもあるんだよ？」

「おや兄さん、責任転嫁とはこれは酷い。今日の夕飯は抜きですね」

「ごめんなさい。それだけは勘弁してください」

素直に土下座をして謝る。

それに響子はよろしい、と答える。なんだろう、上下関係が出来過ぎていく気がする。

「それで兄さん。兄さんの女性遊びの悪化が私のせいとはどういうことですか？」

「寂しかったんだよ」

「……はい？」

ぽかんと、間の抜けた表情をする響子。心なしか、眼鏡も少し傾いている。

「いや、だから、響子が家を出て行って、寂しかったんだよ」

真面目に、そう答えた。

響子が家を出て、僕はひとりになった。

ただでさえ全然帰ってこない両親を持っても、寂しがらなかったのは、彼女がいてくれたからだ。

彼女が家にいてくれたから、家に帰っても、彼女が相手をしてくれると思って、寂しい気持ちにはならなかった。

でも、響子を出て行った。止めたい気持ちはあった。でも、家を出る理由が僕にあるのなら、僕にそれを止めることは出来ない。

だって、僕が悪いのだから。

だから、笑って響子を見送った。いつものように、行ってらっしゃいと言った。

でも、実際に響子がない生活は、本当に寂しかった。

家で一人きりでご飯を食べるのは寂しかった。

家を出るとき、だれも声をかけてくれないのは寂しかった。

学校では、友達も出来たからそうでもなかったけど、家に帰ると、また一人になって、寂しかった。

夕飯を一人で食べて、一人でテレビを見て、一人で風呂に入って。

ほとんどの時間を一人で過ごすようになって、僕は寂しかった。

だから、町をぶらぶらするようになった。放課後も休日も。

声をかけてくれる女の子と仲良くなった。

こっちから声をかけた女の子とも仲良くなった。

友達と一緒に合コンをした女の子とも仲良くなった。

バイトの関係で知り合った女の子とも仲良くなった。

そうしている内に、自然と寂しさは消えて、代わりに携帯にはたくさん女の子の名前があった。

確かに、僕は女の子が好きだ。

だけど、無節操にそうしていたわけじゃない、ちゃんとひとりひとり、真摯に向き合ってきた。

知り合った中には、僕に好意を抱いてくれる子もいた。

そういう子にも、ちゃんと返事をした。不義理なことは、ひとつもしていない。

寂しさを紛らわせるために外に出た結果が、僕の携帯の現状なのだ。

だから、少しは響子にも責任というものがあると思うんだよ、僕は。

「……」

僕の言葉を聞いた響子は間の抜けた表情のまま、僕を見て、そしてそれから言う。

「シスコン」

「……容赦もなにもないよね、ホントに」

実際そうなのだから、否定はできない。むしろ妹が好きでなにが悪いと世間に真正面からぶつかっていききたいところだ。……しないけど。

「本当に仕様のない兄で困りますね」

「恭平をひとりにした響子にも非があると思う」

「……なんですか？」

思わぬところからの助け船。

途中からまったく無関心になっていたアリーシアが、響子を責める。

「響子が家を出なかったら、恭平はこんなに遊ばなかった」

……それはどうかなー？

「そんなことはないと思いますけど」

さすが兄妹。僕という男を的確に把握してらっしゃる。

「でも、実際問題恭平は寂しかったと訴えている。その事実に対して、思うところはないの？」

「……やけに兄さんの肩を持ちますね？　もしかして兄さんに惚れました？」

「そんな話はしていない。それに別に恭平の肩を持っているわけで

もない。ただ、今の状況を見て、責められるべき方を責めているだけ」

「私が責められるべき、と？」

険悪な空気が居間を包んで、我が主と我が妹が睨みを交わしていた。

な、なにか言っべきだろうか。

いやしかし、ここでなにかを口にすれば、その瞬間、矛先が僕に代わるという恐れもある。それだけは避けたい。

だけど、この状況をそのままにしておくわけにもいかないし。

「恭平の思いを聞いて、どうしてそれをわかってあげないの？」

「兄さんは私を引き合いに出して、女性遊びを正当化しようとしているだけですから」

「だったら、恭平は嘘をついたってこと？」

それを言われて、響子は黙った。

ついさっき言ったしなあ。僕はバカ正直だって。

僕が嘘をつかないということを、アリーシアも響子も知ってしまった。
ている。

「……あなたは、私になにをしるというのですか？ 寂しい思いを
させてすいませんでした、と謝ればよろしいのですか？」

「違う」

きっぱりと否定して、アリーシアは、

「抱きしめてあげればいい」

と言った。

その瞬間、僕と響子に衝撃が走る。

抱きしめる。いわゆるハグ。いや、いわゆるもなにもないけど。た

だのハグだけど。

だれも想像しない答えだった。

だからこそ、響子も呆気にとられている。

しかし、アリーシアはあくまで真面目にそれと言った。

……。

「よし響子。僕を抱きしめてくれ」

「殺しますよ？」

侮蔑と嘲笑の込められた低い声で脅される僕。

やはりと言うか、響子は乗り気ではない。

いやまあ、そりゃそうだろうけど。

年頃の妹となれば、兄を嫌い、とまではいかなくとも、若干ウザく思うのが普通だろう。

しかし、僕は響子に近づいて、アリーシアに聞こえないように言う。

「たぶん、アリーシアは引かない。彼女の目は本気だ。おそらく、響子が僕を抱きしめるまで、この話は終わらない」

「……」

聞いた響子は、ちらりとアリーシアを振り返る。

アリーシアの揺るぎない瞳を確認してから、僕を振り返る。

「仕方ありません。ここであの人を怒らせるのは本意ではありませんし」

そう言うと、響子は僕から少し距離を取って、両手を広げる。

「さあ兄さん。カモンです」

「うん、うん」

恐る恐る響子に近づいて、抱きついて見せる。

抱きつく際になんらかの制裁があるかと危惧したけど、それらしいことはなにも起きず、僕は普通に響子と抱き合っていた。

そこで、なにか違和感があった。これはもしかや……。

……うん、間違いない。

「響子、中学生のころからバストがほとんど変わっていないようだね。ちゃんとご飯は食べてるの——」

「アリーシアさん」

「ん」

僕の言葉を遮って、響子が僕から離れた瞬間——

「ひぎゃあああああああああああああああああ——」

第三章 狩人襲来、そして……【5】

「電流制裁をさもオチのように使うのは勘弁してください。この通りです」

土下座で訴えかける。

さすがに一日に四度も電流制裁を受けるのは初めてだ。

身体は、使徒になることで強化された治癒能力のおかげで大丈夫だけど、僕の痛覚が拒絶反応を起こして仕方がない。

「されなくなったら、余計なことを言わなければいいということ
が身に試みてわかりましたか？」

「はい」

「では、二度と私の胸のことに言及しないように」

……気にしてたのか……。

僕としたことが、女性が気にしているところを突いてしまうとは、

とんだ不覚。

妹だからと言って、女性であることに変わりはないのだから、これからは注意しなくては。

響子は言いたいことを言うと、たたみ終えた洗濯物を持って、居間を出る。

居間に残されたのは、未だ正座姿勢を保つ僕と、

「……………」

アニメにご執心のアリーシアのみ。

響子のバストについて言及した僕に電流制裁をした彼女は、デリカシーがない、の一言を僕に浴びせてから、ずっとテレビを見ている。

どうしてこうなってしまったのだ。僕はただ、遊びたかっただけなのに……………。

……………遊び？

「そうだよ！　僕は遊びに行きたかっただけなんだよ！」

当初の目的を忘れていた僕は、立ちあがった。

なんだか話しがいろいろなところに派生したけど、始まりはそこだったのだ。

しかし、今の状況下で考えれば、おそらく響子は僕と遊びに出てはくれないだろう。バストの件で相当怒っているようだし。

なら、アリーシアだ。

さっきは邪な気持ちを持っていると思われたから、電流制裁を受けそうになったけど、そうじゃないというところを全面的に押し出して、誘ってみよう。

「アリーシア、僕と遊びに行かない？」

「行かない」

「……なんで？」

即答されて、思わずへこむ。

おおよそ予想通りだけど、でも、それでも、なあ。

「わたしは『アニマルランド』を見るのに忙しい」

アニマルランドというのは、アリーシアご執心のアニメの名前だ。

十何年も前から続く長寿アニメだけに、その話の数は尋常じゃない。多い。

アリーシアはそれを毎日見ているけど、まだ半分にも到達していない。多く見積もって、五分の一くらい。

今借りてきている分がまだ三本ほど残っているから、それを見終わるのを待つとなれば、夕方は過ぎてしまう。

……なんとかして、アリーシアを遊びに連れだせないだろうか。

さすがにいつも家に籠っているのは見過ごせない、というのは建前

で、アリーシアと遊びたいだけなんだけど。

「アリーシア、『ねこきち』のぬいぐるみ、欲しくない？」

「っ！」

ビクツと、アリーシアの肩が震えた。

ねこきちというのは、アニマルランドの主人公で、動物たちが暮らすアニマルランドを流離う風来坊の猫だ。

そのねこきちが立ち寄る先々の話こそが、アニマルランドというアニメなのだ。

きりつとした目つきに、ツンと伸びた髭。虎模様の体表にぷにぷにの肉球。

外見は可愛いのだが、その実、中身は粹な男であり、村々の問題を解決して、別れも告げず一人で去っていくその姿には感銘さえを覚える。

そのねこきちのぬいぐるみを提示されて、アリーシアは僕を振り返

る。

「……あるの？」

「あるよ。この前、ショップで売っているのを見かけたからね」

女性に送るプレゼントを販売している場所の調査を欠かさなかった自分を褒めてやりたい。

僕の答えを聞いたアリーシアはソファから降りると、再生していたビデオデッキ（アニマルランドはまだDVD化がされていなくて、古いシリーズはまだVHSだ）の停止ボタンを押して、テレビの電源を切る。

そして僕の隣を通り過ぎて、そのまま居間から出て行く。

それから少しして、

「恭平」

居間に戻ってきたアリーシアは、響子が用意した外出用の服に着替えている。

「遊びに行こう」

「え、あ、うん」

どことなく興奮しているアリーシアを見て、少し微笑ましくなった。

第三章 狩人襲来、そして……【6】

「……」

ねこきちのぬいぐるみを抱きしめるアリーシアは、気持ちよさそうに、ねこきちをもふもふしていた。

ねこきちのぬいぐるみはすぐに見つかった。

ぬいぐるみを扱う専門ショップにあるそれは、造りもなかなか良く、それに比例するかのように値も張る。

僕の一月のバイト代の半分を掻っ攫われるとは思いもしなかった……。

ただどまあ、ねこきちを抱きしめるアリーシアの愛らしい姿を見られただけで僕は満足です、はい。

僕たちが現在いるのは家から少し離れたショッピングモールだ。

多くの店が立ち並ぶ中に、ねこきちを購入したぬいぐるみショップもある。

休日ということもあってか、人通りは多い。

その中でも、アリーシアはねこきちを抱きしめて、心がどこかに飛んでいってしまったている。

手を繋ごうと試みたけど、電流制裁の危険性を考えて、止めておいた。

受けたくないという理由が一番大きいけど、人が多い中でそれを受けるのはマズイだろう。

アリーシアがもし妖魔だと知られたら、パニックになるだろうし、それは避けたかった。

だけど、このままだとアリーシアは人混みに流されてしまうかもしれない。

考えている最中に、オープンカフェを発見した。

アリーシアが戻ってくるまで、少しあそこで休憩していくか。

「アリーシア、ちょっとあそこに行こうか」

「うん」

返事をしてくれることだけが救いかな。

アリーシアと一緒にカフェに入り、彼女を席に着かせて、僕は注文をするために移動する。

注文を待つ人の並びに従って、僕も並ぶ。

僕が並んだと同時に、その後ろにだれかが並んだ。

何気なしに、その姿を確認しようとして、

「振り返るな」

と言われる。

女性の声でありながら、その語気の強さに、僕は振り返ることができない。

違う。これは、違う。

語気が強いとか、そういう話じゃない。

なんだ、これ。

なにか、恐ろしいものが、僕の後ろに立っている。

そして、背中になにかが突きつけられている。

恐怖が、押し寄せる。

本能的な恐怖。この恐怖は、後ろのだれかが僕に与えている。

思わず、ごくりと、唾を飲み込む。

「そのまま、列を外れて、人混みに紛れろ」

「なん、だって……？」

後ろからの指示に、僕は問い返すが、それは答えない。

だというのに、僕はその指示に従った。

そうしなければいけないと、わかっていたから。

僕は列から外れて、雑踏の中に足を踏み入れた。

後ろの人物も、ぴつたりと付いてきている。

それからは指示もなく、ただ人混みの中を歩かされる。

人混みに紛れて逃げるという発想はあった。

でも、後ろの人物が何者かわからない以上、そういう突発的な行動に出ることは出来なかった。

周りの人に危害が及ぶ可能性。アリーシアに危害が及ぶ可能性。

相手の思惑がわからない以上、僕はそれに従うしかないのだ。

第三章 狩人襲来、そして……【7】

五分程度、人混みを歩くと、後ろからまた指示が飛んでくる。

「ショッピングモールを出ろ」

「……目的は、なんなんだ？」

「従え」

あくまで一方的な態度。

だけど、僕はそれに従って、ショッピングモールを出る。

もちろん、後ろの人物は付いてきている。怪しまれない程度の距離を保ちながら。

ショッピングモールを出ると、すぐ目の前に交差点がある。

僕はその交差点を進んで、先にある公園を抜ける。

指示は飛んでこない。これでいいということなのだろうか。

ふと、アリーシアのことが気にかかったが、今はどうすることも出来ない。

なるべく早く、彼女のもとに戻るためにも、今は従うしかない。

公園を抜けた先には、小さな商店街がある。商店街と言っても、すでに寂れていて、そのほとんどが店を閉めている。

それも仕方がない。

近くにあんな大きなショッピングモールが出来ているのだから。

商店街は案の定、ほとんど閉まっている。

「近くにある魚屋に入れ」

「魚屋って、あそこか？」

「そうだ」

商店街に入っすぐに、魚屋はある。

しかしそこはもうやっていない。経営が困難になって、家族ごと夜逃げしたって噂を聞いたことがある。

だから、魚屋はシャッターを閉じたまま。

シャッターが閉じられているのに、どうやって入って言っんだ。

一応、言われた通り、シャッターの前までやってくる。

「開ける」

「鍵とか、持っていないんだけど」

「お前の力なら、造作もないことだろう？」

言われて、身体が震えた。

後ろの人物は、知っている。僕が、使徒であるということを、知っている。

だから、言える、お前の力なら、と。

使徒になることで、人間の限界を超越した力を有する僕の力なら、と。

何者、なんだ……？

そうして、振り返ろうとして、

「振り返るな」

ざくつと、背中になにかが突き刺さった。

「うっ！」

熱い痛みが背中に広がって、声を上げそうになる。

だけど、叫ぶほどの痛みではない。鋭利な感覚はまだ背中に残っているけど、それほど深くは突き刺さっていない。

それはすぐに抜かれ、背中から血が流れていることが自分でもわかる。

「開ける」

振り返ろうとした状態のまま固まった僕に、指示を飛ばす人物。

背中に確かな痛みを感じながら、僕はシャッターの溝に指を突っ込んで、力を加える。

やはり鍵がないシャッターは簡単には突入を許さない。

だけど、これはまだ人間程度の力を発揮していないからだ。この数日の間に、力の制御は覚えた。

人間と使徒の境界線を保つために。

だから、これからはその境界線を越えて、使徒の力を使う。

「ぐっ！」

足腰に力を込めて、限界を超越するための力を注ぐ。

この程度、なんてことはない。

ガシャン！

ほんの少し、力を注いだけで、シャッターの鍵は壊れた。

いないとはいえ、ここに住んでいた魚屋さんに心の中で謝罪をしておく。

「入れ」

再び指示が飛んできて、僕はそのまま中を進む。なにもない魚屋の中。寂れている。

暗闇の中を進まされて、そして――

ガシャン！

轟音を上げて、シャッターが閉められる。

その音に反応して振り返るが、背中から襲われることはなかった。

そして僕の瞳は、暗闇の中に、確かに人の姿を見た。

第三章 狩人襲来、そして……【8】

「……天川さん？」

見覚えのある女性が、そこにはいた。

天川李桜。

僕と同じ高校に通う、高校二年生。

黒いセミロングの髪に、無駄の見られないボディライン。吊りあがった目には、少しキツイ印象を覚える。

彼女とはクラスが違う僕だけど、僕は彼女のことを知っていた。

いや、おそらく校内で彼女のことを知らない人はいないと思う。

男子から、『乳神』と崇められる彼女のことを。

現に、今の僕の視線も、天川さんのおっぱいへと注がれている。

一言で言えば、大きい。それに尽きるバストを誇る天川さんは、男子からは『乳神』と崇められ、女子からは羨望のまなざしを向けられる少女だ。

直接会話をしたことはないけど、それでも廊下ですれ違ったりすることもあるので、彼女のことは知っていた。

だけど、わからない。どうして、天川さんが僕のことを……？

「伊浪恭平。単刀直入に訊かせてもらおう」

「な、なにかな？」

思わず後ずさる僕から目を逸らさず、天川さんは言うのだ。

「お前の主は、どこだ？」

それだけで察することができた。

彼女は敵だ。アリーシアを脅かす敵だ。

だからこそ、僕は怯えた。アリーシアの使徒である僕は。

彼女は、どこまで知っている？

僕が使徒で、アリーシアが主であること。言葉からすれば、アリーシアのいる場所、僕の家まではたどりついていないようだけど。

こういうとき、自分の理解力の速さに感謝したくなる。

「主ってなんのことかな？　僕は生憎とSMプレイは好きじゃないんだよねえ」

「誤魔化す必要はない。お前が使徒であることは、一目見ればわかる」

「さいですか……」

見ればわかると言った天川さん。どうやって見抜いたと言っただろう。僕の外見に変化は見られない。どこも変わっていないはずだ。

「気配だよ」

「えっ？」

僕の心と呼んだかのように、天川さんが言い、続ける。

「使徒となったときから、お前の中には妖魔の力が流れる。その気配の規模から、お前が使徒であることは容易にわかる」

なるほど、と頷くけど、正直気配がどうのというのはよくわからなかった。

それ以上にわからないのは、天川さんのことだ。妖魔の力を気配を感じる事が出来るなんて、おおよそ普通じゃない。

彼女は、いったい……？

疑問に思っていると、天川さんが一歩踏み出して、僕は咄嗟に構える。

「安心しろ。お前に危害を加えるつもりはない。むしろ、私はお前を助ける役を担う者だ」

「どういう意味……？」

あくまで警戒したまま、僕は天川さんに訊ねる。

「『狩人』を、お前は知っているか？」

「『狩人』？」

その言葉を、頭の中から探す。

……ある。いや、あると言っても聞いたことがあるだけだ。

あれは、そう。アリーシアが来てから一夜が明けて、そのときの会話の中に、狩人という言葉があった。

アリーシアは追々話すと言って、そのときは話してくれず、未だに僕はそれがなんなのかは知らない。

「『狩人』とは、その名の通り狩る人間を指す。そして狩る対象は妖魔」

妖魔を狩る人間。それが『狩人』。

つまり、彼女はアリーシアを狩るために、僕に近づいた……？

「『狩人』は個人を指すし、妖魔を狩るための組織の名称でもある。まさか、同じ学校の生徒に、使徒がいるとは思わなかったよ」

『妖魔殺し』。妖魔に対して絶対的優位権を持つ異能の力。

そしてそれを振りかざし、妖魔を狩る人間、『狩人』。

気が付けば、僕は店の奥まで追い詰められていた。

いや、天川さんはまったく動いていない。僕が知らず知らずのうちに後ずさっていただけだ。

これは危機だ。

僕は今、間違いなく窮地に立たされている。

妖魔を狩る存在、『狩人』によつて。

第三章 狩人襲来、そして……【9】

僕は死なない。

アリーシアが生きている限り、死ぬことはない。そう彼女は言った。

でも、妖魔に対して優位権を持つ『妖魔殺し』の所持者に殺された場合、僕はどうなる？

本当に死なないのか？

その説明は受けていない。

だから、僕はむやみやたらと動けない。

もし『狩人』が、死という理の外に生きる使徒さえをも滅ぼす存在だとしたら……。

生き残るんだ。死ぬことは考えるな。

僕は死ねない。まだ、死ねない。

探してあげると言った。一緒に、探すと約束した。

一緒にいると言った。高校を卒業するまで、一緒にいると約束した。

二人との約束を、違えることはできない。

だから、生きる。

自分自身に言い聞かせ、落ちつきなく暴れる鼓動をなんとか押さえつける。

そうして一度冷静になり、集中する。

目の前にいるのは天川李桜。妖魔を狩る『狩人』にして『妖魔殺し』の所持者。

その目的はアリーシアだ。

だが、彼女はアリーシアの所在を把握していない。

……いや、おかしい。おそらく天川さんはショッピングモールにいる僕に目をつけていた。

なら、僕の隣にいたアリーシアの存在にも気づいていたはずだ。

なのに、どうしてアリーシアが、僕の主だと気づかなかった……？

彼女は妖魔の力の気配を感じることが出来るはずなのに。

理由は、まあいい。アリーシアの所在を知られていないのは、僕にしてみれば好都合。

彼女を直接狙われなかったことを、今は幸運に思おう。

天川さんは、僕に危害を加えるつもりはないと言った。

僕は使徒なのに、なぜだ？

まずは、ここから攻めて行こう。

「教えてほしい」

「なにをだ？」

「どうして、使徒である僕に対して危害を加えないんだ？ 君は妖魔を狩る存在じゃないのか？」

「いくら使徒に危害を加えようと、契約元である妖魔を殺さない限り、死なないからだ」

それを聞いて安心する。

よかった、僕は死なない。ここで死ぬことはない。

「というのは表向きの理由だがな」

「……なんだって？」

「我々『狩人』の敵は、妖魔に従う人間ではなく、妖魔そのものだ。我々の理念として、妖魔により使徒となることを強制された人間を解放することがあるからな。だからこそ、我々は必要なく、使徒に危害を加えることはない」

また疑問が増えた。

使徒になった人間を解放する。そんなことが、出来るというのか？

「どうやって、使徒となった人間を解放するんだ？」

「主である妖魔を殺す。そうすれば、使徒はその役目から解放され、人間に戻る」

アリーシアは人間に戻る方法はないと言った。

だが、目の前の天川さんは、主である妖魔を殺しさえすれば、人間に戻れるという。

これは、どういうことだ？ アリーシアが僕に嘘をついたのか？
それとも、天川さんが僕を騙し、主ごと滅ぼそうと考えているのか？

答えは、わからない。

だけど、僕はアリーシアを信じる。決めたんだ。彼女とともに在る

ことを。

「伊浪恭平。我々ならば、お前を助けることができる。妖魔の支配から解放することが出来る」

天川さんの言葉に、嘘偽りは見られない。本当に、僕を助けようとしているように思える。

第三章 狩人襲来、そして……【10】

だけど、僕はそれに頷くことはできない。

彼女の言い分が正しいのなら、天川さんがアリーシアを殺せば、僕は人間に帰ることができるかもしれない。

だけど、それはアリーシアが死ぬということだ。

アリーシアが死ななきゃいけないというのなら、僕は人間に戻れなくていい。

彼女の命を踏み台にしてまで、人間に戻りたいとは思わない。

だけど、それを今、天川さんに言えば、どうなる？

僕は天川さんの敵とみなされる。そうなったとき、どうなるか、想像もつかない。

もっと、なにか、ないだろうか。

アリーシアを生かし、僕も無事でいられるような材料が。

……ある。

「天川さん、聞いてほしいことがある」

「なんだ？」

「実は、僕も『妖魔殺し』の所持者なんだ」

僕は、ただの使徒じゃない。使徒である前に、僕も天川さんと同じ、『妖魔殺し』の所持者なんだ。

この事実がどう使えるかはわからない。だけど、同じ『妖魔殺し』となれば、反応は変わるはず。

僕の言葉を聞いた天川さんの表情が変わる。

訪れるのは驚き。

「『妖魔殺し』を持った、使徒、だと？」

「うん」

「……証拠はあるか？」

「どう証明したらいいのかわからない。でも力の種類が『否定』だ
っていうことはわかってるよ」

『雷』が消滅する瞬間を見せてもよかったけど、自分の意思で消し
たと思われる可能性も考えれば、使っただけ無駄だ。

むしろ、危害を加えるのでは、と危惧される可能性を考えれば、し
ないほうが得策だ。

天川さんは答えず、僕を見る。僕は真剣な眼差しでそれに答える。

嘘だと疑われることがあつてはならない。疑念を抱かれれば、敵対
意思があるのではと思われる。それを避けるために明かしたのだけ
ら。

「『否定』ということは、いや、なるほど。だからか……」

「……………」

妙に納得した様子の方川さんに、僕は首を傾げる。

「お前が使徒であることはわかっていうのに、何故か主である妖魔の気配はまったく感じられない。それはお前の『否定』の力が作用し、その妖魔が弱体化したから……そういうことだな？」

「あ、うん」

どうして『否定』が発動したのかまでの経緯は省かれているが、おむね正解なので、僕は頷くしかない。

しかし、まさかこんなところで僕の『妖魔殺し』が役に立つとは思わなかった。アリーシアが僕の血を吸ったおかげで、彼女は妖魔の力の気配を遮断するようになったみたいだから。

僕が頷くのを確かめると、方川さんずんずんと僕の方へと近づいてくる。

なにをされるのかと、手を前に出して構えていると……。

「そうかそうか！ お前は我らの同胞か！」

「へっ？」

天川さんは僕の両手を、自分のそれで包みこむと、今までにない笑顔を見せた。

厳しい表情をばかりを浮かべているところしか見ていなかったからか、大人びていた天川の雰囲気は崩壊し、まるで友達と再会できたことを喜ぶ子供のような彼女の笑顔はとても新鮮に見えた。

「同……胞？」

「そうだろう？ 同じ『妖魔殺し』を持つのだからな！」

満面の笑みで答える天川さん。

どうやら僕は、天川さんの同類とみなされたいらしい。

これはいい。まさか天川さんがこんな態度になるとは想像していなかったけど、この様子なら、なんとかこの場を乗り切ることができ

るかもしれない。

第三章 狩人襲来、そして……【11】

「あの、さ。天川さん」

「なんだ？ なんでも言ってくれ、恭平」

「きよ、恭平？」

「うむ。私たちは同胞だからな。名前で呼び合ってもおかしいこと
はあるまい。恭平も、私のことを李桜と呼ぶといい」

「いや、あの、そんな天川さんの考えで言われても。いろいろとおか
しいと思うんだけど。」

でも、こんなに笑顔を見せる天川さんに対して、ダメとはとても言
えない。

女性にとことん弱い僕は、天川さん、いや李桜に対して頷くことし
かできなかった。

「それで恭平。なにを言いたいんだ？」

「あつ、えつとね、少し、考えさせてほしいんだ」

「考えるとは、なにをだ？」

「いろいろ、なんだ。人間に戻れるとか言われても、僕は人間であることを諦めてたし。だから、急に言われて、少し動揺してるんだ」

少し、罪悪感を覚えた。

人間であることを諦めたのも、戻れると言われて動揺したのも本当だ。

だけど、僕の心は決まっている。

僕はアリーシアを裏切らない。アリーシアの使徒であり続ける。

僕は、李桜が言う同胞ではあっても、仲間にはなれない。

悪いとは思いつつも、それでも、こうでも言わない限り、李桜は逃がしてはくれない。

そう思わせるのは、間違いなく、李桜で。

彼女はアリーシアを殺すことを前提としているのだ。

彼女は僕を解放したいから、アリーシアを殺すのではない。アリーシアを殺し、結果的に僕が解放されるだけなのだ。

アリーシアを殺すということが根本的な部分として存在する限り、僕に出来ることは、どうにかしてアリーシアを生かすことだ。

李桜がどんな『妖魔殺し』を持っているのかはわからない。だけど、『否定』の力で弱っているアリーシアと戦わせるわけにはいかない。

「ふむ、そうだな。急に言われては、動揺しても仕方がないな」

「うん」

「よし、わかった。ならば、明日まで待とう。今日は、知ったことを自分の中で整理してくれ」

「ありがとう」

李桜の笑顔が痛かった。でも、アリーシアを守るためにはこうするしかないのだ。

「私に協力できることがあれば、なんでも言ってくれ。出来得る限り、力を貸そう」

そうは言われても、力を貸してもらうことなんて……。

いや、待てよ。もしかしたら……。

「ねえ、少し訊きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「なんでも訊いてくれ」

これは、少し危険な質問になる。

だけでもし、ここで李桜から回答を得ることが出来れば、それはアリーシアの願いに近づく結果を齎すことになるかもしれない。

なら、少しばかりの危険を冒してでも、僕は質問をしなければなら

ない。

「アレイスター・クロウリーって名前の吸血鬼を知らないか？」

「知ってはいるが……なぜそんなことを？」

「えっと、僕の主が、アレイスターに用があるらしくて、それで少し気になってたんだ。どんな妖魔なのかって」

「ふむ。確かに、奴に用があるという妖魔は多いだろうな……」

「それは、どういう意味なんだ？」

「知らないのか？ と李桜は言う。

僕は李桜のその言葉がなにを意味するのかが理解できなくて、首を傾げるしかない。

「しかし、恭平の主がアレイスターに会うことは叶わないぞ」

「どうして？」

そして知る。

これは、悲しい結末だ。

「アレイスター・クロウリーは、すでに死んでいる」

第四章 君が泣いた夜【1】

かつて、人間と妖魔の間に大きな戦があった。

それは尊厳大戦と呼ばれる戦争だ。

妖魔を狩る『狩人』に対して、普段は団結することなどない妖魔らが手を組み、己らの尊厳を賭けて戦ったことから、尊厳大戦と呼ばれる。

妖魔側の代表は、アリーシアの父であり、血吸いの一族、吸血鬼の男であるアレイスター。

アレイスターの元集った妖魔の数は、その当時、『狩人』に所属していた『妖魔殺し』所有者の十倍にも近い数だった。

しかし、『妖魔殺し』は妖魔に対して優位権を持つ。

だから、数に差はあれど、そうそう押し切られるものではなかった。

しかし、『狩人』は劣勢を強いられていた。

妖魔の指揮者、アレイスターの知略により、『狩人』総本山が襲撃を受け、『狩人』は翻弄され、蹂躪され、殺された。

そして、あともう一步で陥落させることが出来るというところまでやってきて、妖魔たちは敗北した。

尊厳大戦の勝者は、『狩人』だった。

妖魔たちの敗北の理由には、アレイスターが関係していた。アレイスターは、もう少しで戦争を終えるというところで、妖魔を裏切り、姿を消した。

妖魔たちの本拠地を『狩人』に流し、襲撃させたと、言われている。

『狩人』に襲われた妖魔たちは突然の出来事に対処出来ず、戦闘指揮を執っていたアレイスターの裏切りもあって、連携を取ることも叶わず、殺されていた。

結局、妖魔たちは『狩人』総本山への襲撃を諦め、その場から逃亡を図り、散り散りになり、敗北した。

ではなぜ、アレイスターは姿を消したのか。

勝てた戦いだっ たにも関わらず。

それはだれにもわからなかった。

『狩人』に所属する李桜も、アレイスターがどうして裏切ったのかはわからないと言っていた。

『狩人』を恨み、大きな戦まで起こした男が、同胞を裏切った理由。

それは今でも謎とされている。

ただただひとつの事実として、尊厳大戦以降、アレイスターは妖魔と『狩人』の両方から狙われるようになった。

妖魔からは裏切り者として、『狩人』からはその強大な力を恐れられて。

そして、両方からの逃亡の果てに、永遠を司る吸血鬼は、死を迎えた。

彼がいったいなにを想い、なにを守り、なにを失ったのか。

僕には、わからない。

第四章 君が泣いた夜【2】

血の付着した服を捨て、新しい服を李桜に買って来てもらってから、僕は彼女と別れた。

すでに傷跡は塞がっている。

さすがは使徒。治癒能力も高いみたいだ。

ショッピングモールに戻ってきた僕は、すぐにアリーシアと合流した。

アリーシアはずっとねこきちのぬいぐるみを抱きしめていたらしく、その場を動いていなかった。

「アリーシア」

名前を呼ぶと、アリーシアはぬいぐるみを抱きしめたまま僕の方を振り返る。

「ん？」

素っ気ない言葉。いつもならそれに苦笑して、他になにかないの、なんて言ったりもするけど、今はそうはできない。

「アリーシア。話があるんだ」

「なに？」

単刀直入に言おう。

「君のお父さんのことがわかった」

「……本当？」

少しの間を持って、確かめるように訊ねたアリーシアは、ねこきちを抱いたまま席を立つ。

期待と不安が織り交ざった視線が僕を捉える。

言いたくない。彼女に、伝えたくない。でも、言わなきゃいけない。たとえそれが、どんなに辛いことだったとしても。

「ここじゃなんだから、一度家に戻ろう」

そう言つて、僕たちはショッピングモールを出て、家まで戻る。

その間、ずっとアリーシアは無言で、でも、力強くねこきちを抱きしめていた。

家に戻つて、ねこきちをソファに置いてから、僕たちは僕の部屋へと向かう。

響子はキッチンで昼食の用意をしている。

彼女に聞かせるような話じゃない。彼女には、出来ればあまり深く足を踏み入れてほしくない。

部屋に入り、明かりを点ける。アリーシアはベッドに腰を下ろし、僕は床に座る。

まずは、李桜のことから話そう。

「今日、『狩人』に会った」

「……大丈夫だったの？」

「うん。なんとか……」

「そう……」

安心したように呟くアリーシア。

「ねえ、アリーシア。君は、僕はもう人間に戻れないって言ったよね？」

「うん」

「それは、本当？」

「本当」

じゃあ、と僕。

「アリーシアが死ぬと、僕が人間に戻るってというのは、ないの？」

「……そんな戻り方が、あるの？」

僕の疑問に、アリーシアは疑問で答えた。

どうやら、アリーシアは知らなかったらしい。

主が死ねば、使徒は人間に戻るということを。

確かに、アリーシアは、自分が死ぬまで、僕は死ぬことは出来ない
とは言ったけど、それが具体的にどういうことを意味するのかを言
ってはいなかった。

アリーシアが死ねば、僕は人間に戻る。それはおそらく、間違いない。
い。

「『狩人』に言われた。主の居場所を教えろって。そうすれば、お
前を人間に戻してやれるって」

「……教えたの？」

「ううん。教えていないよ」

不安げな表情を浮かべるアリーシアに、続けて僕は言う。

「安心して。僕はアリーシアを裏切らないから。人間に戻れるとか言われても、そっちに靡いたりはしないよ」

「……うん」

頷いて、ほっとした様子のアリーシア。

「それでさ、その『狩人』に、アリーシアのお父さん、アレイスタ・クロウリーのことを訊いてみたんだ」

さあ、言おう。

アリーシアを傷つけるかもしれない現実を、事実を、真実を、突きつけよう。それが僕に出来ることだから。

僕だけがもたらしてあげることができることだから。

第四章 君が泣いた夜【3】

「アレイスターは……すでに死んでいる」

「……」

目を見開いて、アリーシアは口をぱくぱくとさせて、言葉を紡いでいない。

だから僕は、言葉を続けた。

「少し前に、『狩人』が大きな妖魔の力の気配を感じて、隊を編成して、その気配を追ったんだ。そこは、君が言っていたような、白い薔薇が咲き乱れる草原だった」

このことを教えてくれた李桜も、その隊に参加していたらしい。

僕を同胞と呼んでくれた彼女のことだから、おそらく、この話は本当なんだと思う。

それだけに、救いはない。希望は、ない。

「その草原の中心に、アレイスターはいたらしい。『狩人』が到着したとほとんど同時に、消滅してしまったらしいけど……」

吸血鬼は永遠の命を持つ。だけど、それは年を取ることもなく、不老だというだけ。

不死ではない。致命傷を負えば、死ぬこともある。

だから李桜は、アレイスターはだれかに殺されたのだろう、と言った。

話を聞き終えた後も、アリーシアはなににも言わなかった。ただ俯いて、そのままだった。

なにを言えばいいか、わからない。なににも言わない方がいいのかもしれない。

父親が死んだと聞かされた少女に、僕はなにをしてあげればいい？

答えはわからない。

だから僕は、僕が思う正解の行動を取ることしかできない。

床から腰を上げて、俯くアリーシアの頭を胸に抱きしめた。

あの日。僕がアリーシアの使徒となったあの日。

ベッドの中で泣いていた彼女にそうしたように。

優しく抱きしめ、その頭を撫でてあげることしか、僕にはできない。

すると、アリーシアは、

「知ってたの」

と言った。

「お父様が長くはないことを」

言葉に、涙が混じる。

「お父様は、わたしと、人間であるお母様を守りながら、逃げ続けていた。妖魔に襲われ、『狩人』に襲われて。それでも、お父様はわたしとお母様の手を離すことはなかった。でも、その逃亡の中で、お父様は妖魔との戦いで負傷した。その負傷は、お父様の力を奪い続けるものだった……」

アリーシアが、僕の背に腕を伸ばした。弱々しい力で、僕の服を掴んだ。

「わたしたちが住んでいた場所に着いたときには、もうお父様は動くことさえままならないほど、弱っていた。使徒から血を得ても、足りなかった……でも……わたしたちがあそこで過ごした十年は、確かに幸せだった」

「うん」

「妖魔にも、『狩人』にも襲われない場所だった。でも、そこに至るまでの長い旅のせいで、人間であるお母様は病を抱えてしまった。そして……半年前に亡くなった。それを追うように、動けるはずもないお父様が、姿を消した」

涙が溢れている。一度決壊してしまった涙腺。アリーシアが流す涙は滞りを知らない。

「わかってた……お父様が、お母様との思い出の白い薔薇の草原を死に場所を選んだことくらい……」

服を掴むアリーシアの手に力が籠る。

弱体化しているとはいえ、アリーシアの力は強い。

彼女が本気で握れば、制服にも亀裂が入る。

「でも、それでもわたしは、お父様に会いたかった！ 寂しかった
！」

泣き叫ぶアリーシア。

そこで、気づいた。

アリーシアが響子を責めた理由が。

僕の寂しいという気持ちは、アリーシアも感じていた気持ちだった。
だから、彼女はそれがどういうものなのかを理解していた。

だから、だから……。

第四章 君が泣いた夜【4】

気づけば、僕も泣いていた。アリーシアの悲しみが、伝わってくる。

このとき、確かに僕とアリーシアは繋がっていた。

主と使徒として。主の抱く悲しみが、使徒である僕の涙を誘発したのだ。

襲い来る妖魔と『狩人』から逃げ続ける日々は、どんなものだっただろう。

傷つく父の姿を見続けた娘の気持ちは、どんなものだっただろう。

病によって床に伏せた母親の死は、どんなものだっただろう。

そして、父をも失った今の彼女は、どんな思いを抱いているのだろうか。

ふと、自分の中に芽生え始めたひとつの感情に気づく。

愛おしい。アリーシアが、愛おしい。

この気持ちは、紛れもなく愛だ。

僕はこの子のそばにいたい。ずっと、ずっと、そばにいたい。

きっとそれは苦難の道だ。

アレイスターの娘ということで妖魔に狙われるかもしれない。

妖魔ということで『狩人』に狙われるかもしれない。

それこそ、アレイスターがたどった逃亡の日々に身を投じることになるかもしれない。

それでも、この子と生きて行くことができるのなら、それでも構わない。

湧き上がるこの気持ちは、使徒になったことによるものなのかもしれない。

アリーシアを守らなければいけないという思いを、勝手に生みだしているのかもしれない。

なら、それもいい。それが、アリーシアを守るうという気持ちになるのなら、いい。

「僕は、君とずっと一緒にいる」

誓いを捧げよう。

「だれがなんと言っても、僕は君と在る」

人間への未練がないかと問われれば、あると答える。だけど、そんな未練されも捨てる。

「君と在るために、僕は人間であることを捨てる。君と永遠の時間を生きるために、人であることを放棄する」

君だけのために。ただただ君だけのために。僕のすべてを捧げる。

この気持ちに抗いはしない。この気持ちを受け入れる。

「いい……の？」

胸の中で、アリーシアが訊ねる。

「一緒に、いてくれるの……？ どこにも、行かないの……？」

揺れる黒眼が、僕を見た。

「君がそれを望んでくれるのなら、僕はそれに応える」

「あっ……」

アリーシアの疑いを掻き消すために、彼女の小さな身体を強く抱きしめる。

小さく声を漏らしたアリーシアの腕にも力が籠る。

「お父様も……お母様も……いなくなった……」

「うん」

「恭平もきつと……いなくなる……」

「不安にならないで、アリーシア。僕は、僕だけは君のそばにいるから。妖魔も、『狩人』だって敵に回しても構わない。それらすべてから君を守るから」

この思いを、アリーシアに届けたかった。僕が抱くこの愛を。

だけど、そうは上手くはいかない。だれかに愛を届けることは、簡単じゃない。

簡単に伝える方法はある。

でもそれは、使徒である僕がしていいことじゃない。僕は使徒で、あくまで彼女は主なのだから。

だから、言葉で伝えるんだ。

「僕は、君を愛している」

胸の中のアリーシアが震えた。

「……本当に……そばにいてくれる……？」

「うん」

即答だ。迷う気持ちはない。

「……恭平」

「なに？」

「……ずっと、そばにいて」

アリーシアが、僕との永遠を望んでくれた。

なら、僕はそれに応えるだけでいい。

「わかったよ」

だれが、彼らを血吸いの鬼と呼んだのかは知らない。

だけど、ひとつ、言えることがある。

アリーシアは鬼じゃない。

か弱き姫だ。

彼女は、か弱い吸血姫なのだ。

だから僕は、か弱い彼女を守るために……僕の愛しい吸血姫に、永遠を誓おう。

第五章 吸血姫の使徒【1】

月が昇る空の下。

僕は彼女を待っている。

時間にして、深夜。

彼女は、やってくる。

屋上の扉が開いて、そこから姿を現したのは天川李桜。

『妖魔殺し』の所持者にして、『狩人』だ。

僕にははっきりと、李桜の姿が見える。

「整理はついたのか？」

屋上を中心まで来て、李桜は訊ねた。

李桜は、僕が主の居場所を教えるために、この場所に呼んだのだと思っっているのだろう。

でも、それは違う。だから少し、胸が痛んだ。

僕は李桜から少し離れたフェンスに背を預けていた。

一度天を仰いで、それから李桜に答える。

「うん」

「そうか、では――」

「教えない」

李桜の言葉を遮って、僕は言う。

「僕は、僕の主の居場所を、君には教えない」

一瞬、呆気にとられた表情を浮かべて、それからキッと厳しい表情へと変わる。

「……なぜだ？」

「教えれば、君は僕の主を殺す。そうでしょ？」

「当前だ」

あくまで断言する。

「我々『狩人』は妖魔を滅するための存在なのだから」

それが『狩人』という存在なのだ。

アリーシアからも聞いた、『狩人』がどういうものなのか。

彼らは、根本的な部分として、妖魔の存在を肯定することはないのだ。

人は、自分たちにはない力を持つ者を恐れる。

人は、妖魔を恐れた。

その結果、『妖魔殺し』という、妖魔に対抗できる力を持った人間たちが作り上げた組織が『狩人』だ。

妖魔を滅するという大義を掲げ、世界の常識の外で活動が続けてきた存在。

だから、李桜の答えはある程度、予想は出来ていた。

「結論から言うよ。僕は、僕の主を君に殺させはしない。言うておくけど、主に脅されてとか、傀儡になっているとか、そういうわけじゃないよ？ あくまで、僕は自分の意思で、それを選んだ」

「人間に戻りたくないのか？」

「そうだよ、っていうのは少し違うかな。僕は人間に戻るわけにはいかないんだ」

どういう意味だ？ と李桜。

「僕には永遠が必要なんだ」

アリーシアとともに在るために。

たとえアリーシアを殺すこと以外に人間に戻る方法があつたとしても、僕はそれを選びはしない。

彼女と生きるためには、人間の生はあまりにも短いのだから。

第五章 吸血姫の使徒【2】

「なぜだ……なぜ、妖魔に与するのだ？」

「愛しているんだ」

僕の言葉に、李桜は、彼女らしくない表情を浮かべた。

言っていることの意味が理解できない。

目の前の男はいったいなにを言っているのか。そんな感じかな。

僕も別に理解されようとは思わない。

妖魔は、言ってみれば化物だ。

その化物を人が愛するなんて、およそ普通じゃない。

当事者である僕自身も、普通じゃないと思っている。

もしかしたら、アリーシアのお母さんもこんな気持ちを抱きながら、アレキスターを愛していたのかもしれないな、なんて思う。

李桜の反応も当然のことだ。

そんな李桜に僕はふざけたように言う。

「愛だよ？ わからないかな？ 英語で言えばラブって意味の愛なんだけど」

「……冗談、だよな？」

引きつった笑みを浮かべて、李桜が僕を見た。

僕は首を左右に振って、それに答える。

「冗談でこんなこと言いやしないよ」

そしてもう一度言う。

「僕は、僕の主を愛している」

空気が砕けた。

溢れる殺気が、突き刺すように襲いかかる。

思わず足が震えそうになって、それを必死に堪える。

弱さは見せるな。どれほど怖くても、気丈に振舞え。

自分に言い聞かせ、あくまで動揺を表には出さない。

一歩、李桜が踏み出す。

「今ならまだ間に合う。冗談だと言え。そして、主の居場所を吐け」

「嫌だよ」

「そうか……残念だよ、恭平。お前とは、仲良くなれる気がしたのだがな」

「僕はまだ仲良くなれると思ってるけどね」

それはない、と李桜は切り捨て、僕に背を向け、右腕を前に突き出す。

「広がれ、『炎』」

言葉を発した瞬間、彼女の伸ばした腕から燃え盛る火が、濁流のように溢れだし、屋上に広がる。

それは屋上の扉への道を遮るように広がり、そのままそこに残る。

それから李桜は振り返る。

「私の『妖魔殺し』、『炎』は火を自在に操ることが出来る能力だ」

手のひらに小さな火を顕し、李桜は言う。

「お前は死なない。だが、死ぬよりも非情な苦痛を与え、主の居場所を吐かせてやるっ」

すでに優しさは残っていなかった。

目の前の彼女は、僕を同胞と呼んでくれた少女ではない。

僕の主を狩るために、僕を痛めつける『狩人』だ。

この展開は、予想していた。

だから、特段驚きはしない。

李桜の『妖魔殺し』を知って、それに対して動揺しているだけ。それ
れも、表には出さない。

恐れるな。

僕は死なない。

僕に死はない。

アリーシアが無事である限り、なにも恐れる必要はないのだ。

女性に腕を上げるのは、気が引ける。

僕が一番嫌いとすることだから。

女性には優しくするようという父さんの教えに背くことになるから。

それでも、僕は一步前に足を進めた。

アリーシアを守ることが出来るのなら、僕は喜んでこの腕を振るおう。

それが、李桜を傷つける結果になったとしても。

「これが本当に最後だ……同胞として、言おう。主の場所を言え」

「断る」

宣言して、拳を握る。

「僕は守ると誓ったんだ。だから、彼女を殺させはしない」

そして、ほぼ同時に、僕らは駆け出した。

第五章 吸血姫の使徒【3】

アリーシアは、伊浪家の縁側から、恭平にもらったねこきちを抱きしめながら、空を眺める。

どこまで続く空の下で、恭平は戦っている。

自分の命を狙う『狩人』と。

自分を守るために。

勝てるとは思えない。思うことが出来ない。

アリーシアは父と母、そして父の使徒たちとともに、妖魔と『狩人』から逃げてきた。

彼らがどれほどの力を有していて、どれほど恐ろしい存在なのかも知っている。

だから、恭平が勝てるとは思えない。

恭平には力がない。

彼の『妖魔殺し』、『否定』は、完全に対妖魔の力だ。火や水を操れるわけでもなく、使いを召喚できるわけでもない。ただ、妖魔に関する事象を『否定』するのみ。

並はずれた身体能力を持っていたても、『妖魔殺し』の所持者に対して、それがどこまで通用するかもわからない。

唯一、使徒として継承している『雷』も、『否定』による制限が施されている。

そんな彼を行かせてしまったことを、今さらになって後悔する。

確かに、恭平は死なない。

肉体がどれほどバラバラになろうとも、灰になろうとも、永遠を司る吸血鬼の使徒は、主が存命である限り『死』という理の外に存在するため、何度でも再生できる。

だが、それだけなのだ。

死はなくとも、苦痛は存在する。

どれほどの苦痛が恭平を襲うことになるのか。

それを考えるだけで、アリーシアは泣きそうになる。

出かける寸前の恭平は笑っていた。

——必ず帰ってくるから、待っていて——

そう言い残して、戦場に足に向けた。

それがやせ我慢であることくらい、気づいていた。

クロウリーの一件を経て、恭平とアリーシアの間を繋ぐ絆は確かに強くなっていた。

故に、近くにいれば、使徒の心のうちを微かながらも感じることができる。

恭平は怯えていた。これから起こるであろうことに。

それでも、アリーシアは恭平を止めなかった。

恐怖以上に、恭平の中を満たしていたものが存在するからだ。

だれよりも、アリーシアを想う気持ち。

すべてを投げ打つても守るという誓いをかけた少年の想いを、アリーシアは無下にすることは出来なかった。

だから、行かせてしまった。

それを今になって後悔して、でも、恭平に絶対に来てはいけないと
言われているので、後を追うことさえできない。

だから、空を眺めることしかできない。

第五章 吸血姫の使徒【4】

「まだ、起きていたんですか？」

足音が聞こえて、声が掛けられる。

「うん」

アリーシアは振り返らず、声の主、響子に答える。

響子は恭平の妹だ。

それを知っているアリーシアは、少なからず、彼女に対して罪悪感を覚えている。

実の兄を使徒にされて、そして彼女は伊浪家に戻ってきた。

おそらくは、兄を救うため。だが、方法はない。いや、なかった。少なくとも、アリーシアは知らなかった。

だから、響子は諦め、兄を使徒と認め、なおも兄のそばにすること

を決めた。

彼女とは仲良くできないアリーシアだが、兄を想う彼女の強さは認めていた。

そんな響子にアリーシアは告げた。

自分を殺せば、恭平を救うことが出来ると。恭平を人間に戻すことが出来ると。

殺されても良かった。事後的にとはいえ、恭平を使徒にしてしまったのは間違いなく自分のせいで、その償いとして殺されるのなら、それも仕方がない、と。

恭平が家を出てから、それを響子に伝えたのだ。

だが、響子はアリーシアを殺さなかった。

——兄さんが人間に戻りたがっていないのに、私が勝手にそんなことをするわけにはいきません——

そう言って、普段と変わらない様子で浴室に姿を消した。

普段は恭平のことを雑に扱う響子だが、その心のうちでは、本当に恭平のことを想っている。

だから、恭平が望まないことをしない。

そして、恭平がなにを望んでいるのかを理解している。納得したくはない様子だが。

「兄さんはきっと帰ってきますよ」

アリーシアは頷くことができなかった。

確証はない。もしかしたら、『狩人』に捕まるかもしれない。

そして、どうにかして自分の居場所を付き当てるかもしれない。

考えれば考えるほど、嫌な予感がしてならない。

「冷えますよ」

隣に並んだ響子が、アリースシアにパーカーを羽織らせた。

「ごめん」

「どうして謝るんですか？」

「恭平は、たぶん、使徒としての性質上、わたしを愛してしまったから」

本当にそんなことがあるのかはわからない。だけど、本質的に使徒は主を大切に想うものなんだと思う。父のもとにいた使徒たちもそうだった。傷つくことを恐れず、勇猛果敢に戦っていた。

そして、父が行方を晦ましてからも、自分の世話をしてくれていた。

使徒は主を愛する。

だから、恭平がアリースシアに抱く愛も、きっと使徒のそれに相違ない。

そう思うアリースシアに、響子は言う。

「兄さんの気持ちを、あなたが勝手に決めないでください」

それに、と響子。

「今、その気持ちのために戦っている兄さんに対して、あなたがそんなことを言うのは、あまりにも酷い」

言い咎められて、アリーシアは俯いた。

「兄さんはバカで、女の子が好きです。ですが、それが兄さんのすべてではありません。あの人は、だれよりも優しい」

悠然と語る響子の言葉は、アリーシアにも響く。

だれよりも恭平のそばにいて、だれよりも恭平という男を理解している響子だからこそ、それが出来る。

「兄さんの愛を、信じてあげてください」

「信じる……」

響子の言葉をなぞるようにして呟き、再び空を見上げる。

半分に欠けた月が空に昇っている。

恭平は、この空の下で戦っている。自分のために。

恭平の愛を信じよう。

恭平は必ず帰ってくる。

そばにすることを約束してくれた恭平だから。

永遠を誓ってくれた恭平だから。

（恭平を守って……お父様……）

懇願するように瞳を閉じて、ねこきちを抱きしめたまま静かに祈る。

恭平の無事を。

第五章 吸血姫の使徒【5】

使徒となることにより、肉体を強化された僕は、李桜よりも優れている。

いくら『妖魔殺し』の所持者とはいえ、異能の力を有するだけで、肉体が強化されるわけじゃない。

だからこそ、僕は瞬時にして李桜の眼前まで跳ぶことが出来た。

だが、

「甘い！」

拳を振りあげ、それを李桜の腹に叩きつけようとした瞬間、眼前に広がるのは彼女を守るようにして現れた『炎』。

もしこのまま拳を通せば、僕の拳がどうなるかって、わかりきっている。

だけど、それがどうした。

僕は死なない。どれほど傷つくことがあるうが、関係ない。

『炎』さえも貫くように、拳を振るう。

しかし、

「なっ！」

拳は『炎』によって止められた。

予想外のことに、一瞬の隙を生んでしまう。

「そこだ！」

「っ！」

隙を見逃さない李桜が左手を振り上げる。

そこから湧き上がる『炎』は腕を模した形を創造し、なぎ払うように僕に襲いかかる。

それを、人間離れた跳躍でなんとか回避し、李桜から距離を取る。

空振りを見せた『炎』の腕は、李桜を守るように展開した『炎』の盾とともに消滅する。

少し離れた距離感を保持したまま、僕たちはにらみ合う。

おかしい。

李桜の『炎』は、どこかおかしい。

僕は、『炎』の盾を殴りつけた拳を見る。

僕が『炎』の盾に拳をぶつけていたのは時間にして二秒程度。

それくらいあれば、拳が黒く焦げていてもおかしくはない。

だけど、僕の拳にはそんな痕が見られない。

いや、そもそも、僕は『炎』の盾から熱を感じなかった。

どうしてだ……？

「不思議か？」

不意に、李桜の口が開いた。

拳を見つめながら疑念の表情を浮かべる僕に向かって、左手を伸ばして見せる李桜。

そこから現れるのは『炎』の腕。

「私の『妖魔殺し』、『炎』には二種類の使い方がある」

『炎』の腕が天にそびえる塔のように振りかざされ――

「ひとつ、『固体化』」

それがコンクリートの地面に強く叩きつけられる。

ドスンッ！

まるで地震が起きたかのような衝撃が発生し、揺らめく校舎に、なんとか踏ん張る。

叩きつけられた『炎』の腕の跡地には、大きな窪みが見られ、粉碎されたコンクリートの破片が散らばる。

それを為した『炎』の腕はすでに姿を消したが、李桜は依然として、腕を伸ばしたままだ。

「私の『炎』は、火をひとつの固体として扱うことが出来る。故に、こういう風に物理的な破壊を行うことや私を守る鋼鉄にも似た盾を生み出すことも出来る」

「……なるほどね」

なんとか頷いてみるものの、内心、焦りが出ている。その証拠に、額には脂汗が浮かんでいる。

つまり、李桜が顕したさっきの『炎』は『固体化』が施されたものだったということだ。だから僕の拳は『炎』を貫くことが出来なかった。

理解して、素直に厄介に思う。

自傷行為覚悟で『炎』を貫き、李桜に攻撃を加えるという策は、もう取れない。

李桜の『炎』を『固体化』され、その間に新たに発生した『炎』に襲われるというのがオチだからだ。

第五章 吸血姫の使徒【6】

「そしてこれが、『炎』の本来の力」

李桜の腕から溢れる『炎』が、揺らめきを見せながら伸びる。

「『燃烧』」

気づいた瞬間には、遅かった。

だから、咄嗟に働いた防衛本能に感謝したくなる。

『燃烧』という言葉が発した瞬間、『炎』は瞬時に僕に向かって伸びた。

反応は遅れたものの、なんとかそれを回避することが出来た。

だが僕は、『燃烧』という言葉が意味なす理由を、身を持って味わっていた。

「つく……」

左肩を走る痛みに、思わず呻く。

見れば、僕の左肩には焼け跡が見られ、黒く染まっていた。

間違いない。燃やされた。

ふと、僕がさっきまで立っていた場所の後方を見ると、その先にあったはずのフェンスの一部は姿を失い、その結合部らしき場所は溶岩に溶かされたかのように変貌を遂げていた。

これが、『燃焼』の力。

これは、ダメだ。

いくら死なないからと言って、これを喰らえば、おそらく僕は、どうしようもない。

足が震えた。

心を恐怖が満たした。

なんで？

僕がなにかしたのか？

いったい僕がなにをした？

ダメだ。

正氣に戻れ。

このままじゃ、本当に、ダメだ。

そう思うのに、脳内に一度描かれた『最悪の光景』が僕の心を襲う。

恐怖におびえる僕が、立ち上がろうとする僕の足を押さえつける。

そんな僕を見下した李桜の足音が響く。

「苦しいなら、やめてしまえばいい」

やめるって、なにを？

「妖魔を守る必要などない」

アリーシアを守る必要はない？

「ただ一時の感情に流され、人生を棒に振るな。愛するのなら、人を愛せ」

人を、愛する？ これは、一時の感情？

李桜の言葉を反芻するように心の中で問う。

ここで屈すれば、僕が見た『最悪の光景』は訪れない。もう、恐怖に縛られる必要はない。

第五章 吸血姫の使徒【7】

でも、そうすれば、僕は失う。

——なにを？

アリーシア。僕の主。僕の愛しい吸血姫。

——いいじゃないか、だって、彼女は妖魔なんだ。僕とは違う。

なにが、違う？

——なにつて、そりゃ全部だよ。根本的な部分で違うだろう？

そうだろうか。

——そうだよ。

本当に？

——ああ。

でも、彼女は泣いたんだ。

——泣いたね。でも、だから、なに？

お父さんが死んだって聞いて、泣いたんだ。

——ああ。

それは、僕たちとは違うの？

……。

素肌を見られて、恥ずかしがったんだ。パソコンを見て、驚いたんだ。アニメを見て、のめり込んだんだ。僕のために、響子を責めてくれたんだ。ねこきちを抱きしめて、気持ち良さそうにしていたんだ……。

——いいのかい？ その先を口にすれば、もう戻れないよ？ それを口にするってことは、僕を……『人間としての伊浪恭平』を否定するということだ。そうすれば、君は死をも恐れない勇猛果敢な戦

士になれるだろう。だが、それを選ぶということは、苦しい道を選ぶということだ。それはきっと、君が想像する以上のものだろう。それでも君は、その先を言うのかい？

言うよ。だって、誓ったんだ。『使徒としての伊浪恭平』である僕は、彼女に誓ったんだ。

——そうかい。なら、言いなよ。そうすれば、君は……『僕』はもう大丈夫。どんなものをも恐れない存在になれる。

うん。僕は、前に進むよ。

アリーシアを守るためには、人間だったころの弱さは必要ない。すべて放り捨てなければならない。

覚悟は、決めた。

だから口にする。

誓いを。

「一緒に生きるって、約束したんだ」

第五章 吸血姫の使徒【8】

恐怖は、消えた。

肉体に力を込めて、立ち上がる。

足は震えていない。心の中は穏やかだ。

脳内は異常なしと教えてくれている。

正常運転。僕はもう、大丈夫だ。

顔を上げると、眼前の李桜が驚いたように僕を見ている。

「なぜそつも憑き物が落ちたような顔をしているのだ？」

「ははっ、ちょっと覚悟を決めてきたんだよ」

笑って見せることが出来た。

それだけで、李桜は気に喰わないと言いたげに顔を歪める。

「僕に足りなかったのは、覚悟だったんだ。言葉では何度も、愛しているとか、ずっと一緒にいるとか言っつて、こんな状況になるまで、それが意味する本当のことに気づくことが出来ていなかった」

「覚悟を、決めた？」

「うん。そうすることが出来たのは、君のお陰だ。だから、ありがとう、李桜」

敵対する少女に、微笑む。

「君が僕に恐怖を教えてくれた。彼女と生きるということが、どういうことかを教えてくれた。だから、僕は今こうしてここに立つことが出来る」

天を仰いで、深呼吸をする。

それから李桜を真っ直ぐ見て、告げる。

「僕は、血吸いの一族、アリーシアが使徒、伊浪恭平」

名乗ること、『伊浪恭平』という存在を再確認する。

そうして、僕は初めて、彼女を守る存在になれるのだ。

人間には出来ない、使徒だからこそ出来る戦いを、始めることが出来る。

「主に仇為す存在を僕は許さない。彼女を狩るというのなら、僕は君の敵となる」

僕の宣言を受けて、李桜の憤怒の表情が、眼前に迫った。額と額がぶつかるほどの距離。踏み出したの僕だった。

速さに対応出来ない李桜には、突発的な行動が有効となる。

遠距離で戦える彼女と違い、僕に出来るのはおよそ肉弾戦のみ。

『アレ』は、使い物になるかわからないから。

すでに後ろに引いている右の拳は、突き出すだけで十分だった。

「くっ！」

この距離で防御の『炎』を生みだすことは出来なかったのか、李桜は左腕に『炎』を創造するが、遅い。

踏み込んだ足に全体重を任せ、右の拳を突き出す。

イニシアティブを握るために、この一撃は確実に決める！

ガンッ！

李桜の腹と僕の右拳の衝突が生み出した轟音。それはおよそ、あ
るべきものではない。腹を殴った程度で、そんな音が鳴るはずがな
い。

おそらく、服の下に『炎』を創造したのだろう。

鋼鉄と化した『炎』を殴りつけた僕の拳には、確かに痛みがあった。

だけど、今はその痛みが心地いい。戦っているという状況を、再確認させてくれるから。

そして僕は、拳を下げることなく、逆にそのまま前に押した。

勢いはまだ生きている。ここで止まりはしない。

「いっけえええええええええええええええ！」

絶叫とともに、耐える李桜の肉体を、いや、李桜が展開する鋼鉄の「炎」を押し飛ばす。

僕の身体を支えていた左足からブチツという不吉な音が聞こえたが、
どうでもいい。この一撃に集中する。

「ぐうつ！」

呻き声を漏らす李桜は、耐えられなくなって、背中から吹き飛ぶ。

背中をコンクリートの床にぶつけ、それに止まらず、反転した身体がごろごろと転がり、フェンスにぶつかることで停止する。

しかし、僕も無事では済まなかった。

「がっ！」

李桜が展開していた『炎』の腕が、僕がなぎ払った。

李桜が吹き飛ぶ瞬間とほぼ同じタイミングだった。

僕は李桜に集中していたがために、それに対応することが出来ず、フェンスに叩きつけられ、その勢いでフェンスは形を歪にする。

そしてそのまま、僕はコンクリートに倒れる。

全身を痛みが駆け抜ける。

僕を支えきれなかった左足。『炎』の腕に叩かれた脇腹。そしてフェンスに叩きつけられた左半身。

およそ、人間だったら耐えられない痛みに襲われ、意識が吹っ飛びそうになる。

でも、耐える。ここで意識を失うわけにはいかない。

だって、李桜は、まだ、起きてるから。

僕よりも先に、李桜はその身体を起こした。

「つく……やってくれたな……」

李桜の恨み節が、おぼろげな意識の状態である僕にも届いた。

僕はまだ動けない。呻き声さえ、上げることが出来ない。

動かなくちゃ。じゃないと、李桜が来る。『炎』が、僕を襲う。だから、動かないと。

そう思うのに、僕の身体は動いてはくれない。

「死はないにせよ、痛みはあるだろう」

揺らめく陽炎を携えて、李桜が近づいてくる。

「私は、妖魔を殺す。そのためなら、障害となるすべてを破壊する」

「……な、んで……？」

ようやく搾り出せた声も、弱々しかった。

僕の疑問に、李桜は迷いなく答える。

「それが『狩人』だからだ」

その言葉が放たれると同時に、『炎』が振りかざされて、僕は――

第五章 吸血姫の使徒【9】

「……なに……？」

「いえ、帰りが遅いので、どうしたのかと」

「もしかして……心配してくれてるの？」

「はい、兄さんが帰りがけに、女性をひっかけていないかという心配をしています」

「はは……大丈夫……そんな暇、ないから……」

「……大丈夫ですか、兄さん？」

「……問題、ないよ……それより、アリーシアは、もう寝た？」

「いえ、起きてます」

「そう……」

「兄さんを待っているんです」

「……うん」

「兄さんのことを信じて、待っているんです」

「……うん」

「だから、帰ってきてください」

「……うん。大丈夫、帰るから」

それだけを言って、携帯を切った。

ポケットに戻すことも面倒で、そのままコンクリートに放り投げる。
転がる携帯。垂れる右腕。

よろめく身体を持ちあげて、フェンスに背を預ける。

先ほどまで僕が埋まっていた場所だけに、なかなかいい感じにフィ

ットする。

それに苦笑する。もう、そんなフェンスがいくつできただろう。

李桜の『炎』の腕に、どれほど殴られただろう。どれほどなぎ払われただろう。

もう、数えることも面倒になるほど、殴られて。なぎ払われて。

そうして、現在に至る。

「電話か」

「……うん。妹から、ね」

同情を求めるとか、そういうことじゃなくて、ただ事実として答える。

「可哀想な妹だ」

「……」

答えられない。

だって、実際にそうなのだから。

「健気に帰りを待つ妹のために、従え、恭平」

「……断る」

それだけは、答える。それだけは揺るぎないから。

「まだ、苦しみ足りないのか……？」

「無駄だって……僕は、どれほど言われても、従わないから……」

そう言うと、李桜は哀れむように、僕を見た。

そして、左腕を前に突き出す。

「もう、いい。十分だ。これ以上お前を苦しめようとも、お前はな

にも言わない。吐かない。これは、無意味だ」

だから、と李桜。

「いつそのこと、消えてしまえばいい。灰さえ残らないほどに燃え尽きればいい。苦しいのは一瞬だ。一瞬で、終わる」

李桜の左腕に、『炎』が纏われた。

それはさつきまでの『固体化』の『炎』とは違う。すべてを燃やし尽くす『燃烧』だ。

もし、李桜が言うように、灰さえ残らないほど燃え尽きてしまっても、僕は元通りに戻る。

僕はアリーシアから力を供給され、僕の肉体を治癒するのにも、その力を用いている。

だから、僕の肉体が失われても、アリーシアさえ生きていれば、肉体は再構成される。

だけど、それにはかなりの時間を要するだろう。

その間にアリーシアが死ねば、それで終わり。そこまで。

「じゃあな、恭平。さようなら」

悲しい表情で、李桜が別れを告げた。

彼女が纏った『炎』が、僕に目掛けて一直線に向かってくる。

終わり……なのかな……？

ここで一度、僕は消えてしまふのかな？

ダメだって、そうなっちゃいけないって、わかってるのに。

でも、どうしようもない。僕にはどうしようもない。

目を閉じようとして、諦めを迎えた瞬間、脳に響く。

——ずっと、そばにいて——

第五章 吸血姫の使徒【10】

アリーシアの声。髪。瞳。顔。手。足。背中。腹。

それらすべてが脳裏を過って――

「アリーシアあああああああああああああああ！」

気がつけば、絶叫とともに僕は左腕を構えていた。

そこに魔力を集中し、限界が近づくその瞬間まで練って、『それを放つ。』

左腕に『炎』がぶつかる寸前、そこから放たれた青白い閃光が『炎』と接触する。

バンッ！

『炎』と『雷』の接触により、両者は弾け、小規模の爆発を生み出した。

「うつぐ、あああああああああああ！」

爆発に巻き込まれた左腕が、変質する。肌が、肉が焼ける異様な感覚。

そしてそれらが消滅する。

襲い来る痛みと、不快感から飛び出た悲鳴を掻き消した爆発音とコンクリートを粉碎したことにより生じた煙が晴れて、視界が明瞭になる。

そこで僕は、ようやく左腕の状態を確認することが出来た。

ない。

肘から先が、なくなっている。

「あつく、うつぐ……」

思わずまた悲鳴を上げそうになって、それを耐える。

覚悟はとつくの昔にした。

こうなるかもしれないことは、どこかにあつたはずだ。

だから、恐れるな。受け入れろ。治る。どうせ、治るんだ。

涙目になりながらも、黒く焦げてしまった左腕を押さえ、なんとかふらつく身体を支える。

一度、この現実を受け入れるために、左腕の状態を確かめる。

肘から先は、やはりない。それはもう、受け入れた。

それから上へと視線を移行する。

肘から肩の付近（上腕二頭筋の辺り）までは、黒く焦げてはいるが、まだある。

だけでもう、左腕は使い物にはならない。治癒が終わるときまで。

身体はどれだけ傷ついても治る。現に、僕が負った傷のほとんどは

もうすでに治っている。

いつまでも戦うことはできる。

だけどそれは、僕が痛みに耐えることが出来ればの話だ。

痛みに耐え、意識を飛ばすことなく、立ちあがり続ける。

そう思い続けて、どれほどの時間が過ぎただろう。

もしかすると、まだ一時間も経っていないのかもしれない。

僕にはもう、わからない。ただ、意識を保つことだけに必死だから。

「守るって……言っただ……」

自分に言い聞かせるように呟いて、ぜえぜえ、と息を吐きながら、崩れた体勢を立て直す。

煙が晴れた先にいる李桜は、驚きはしつつも、それでも厳しい表情を崩すことはない。

「なぜそうまでする？」

「だから……愛しているんだって……」

「相手は妖魔だ。人間じゃない」

「だから……なに？」

李桜の言うことが、さもなくだらないと言うように僕は切り捨てた。

「彼女が妖魔だとか、どうでもいいんだ……ただ……たまたま好きになった女の子が……妖魔だったってだけだよ……」

ただそれだけなんだ。

僕の言葉に、李桜が顔を顰めた。

許せないんだろうな。

李桜は妖魔を許さない。いや、『狩人』という存在そのものが、妖魔の存在を許さない。

だから、その妖魔を愛している、なんて言う僕を許せない。

わかりやすい構図だ。

それでいて、理解できない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3916ba/>

僕の愛しい吸血姫

2012年1月10日23時47分発行